

彙報

二〇二〇年四月より
二〇二二年三月まで

研究狀況（二〇二〇年度）

研究班 公募型研究班

日本鍼灸醫術の形成——近世醫學史の再構築

班長 長野 仁

今年度は海外からの特別講師を招いて特別講演會を実施予定であったが、感染症拡大の影響のため來年度に延期せざるを得なくなり、また本研究班は班長をはじめ、班員にも醫療従事者が多いことから、共同研究會の開催計畫等においても大幅な變更を餘儀なくされた。こうした計畫の變更はあったものの、個々の班員や小規模グループによる資料調査や讀解をすすめることにより、とくに鍼術流儀書の成書や流派の成立年代に關する從來の學說を重點的に再検討し、その成果を持ち寄って年度後半に集中して共同研究會を開催、各研究成果に關する討議をおこなった。また、研究期間中にすでに刊行した近世醫家新出史料集第一冊・第二冊を改訂・増補し、近世醫家新出史料集Ⅰ 武田時昌監修・長野仁編集『改訂版 儒醫姓名録——後藤良山門人録の影印・翻刻』（長野仁解説の加筆訂正）、近世醫家新出史料集Ⅱ 武田時昌監

四國醫療專門學校
杉山流の形成史）入江流・圭庵
流を中心に 發表者 大浦慈觀
東洋鍼灸專門學校
二〇二二年二月十四日 醫學・鍼灸各流派の成
立と傳承（二） 古方派醫學と
雲海士流 司會 長野 仁
後藤良山の生涯とその一族につ
いて 發表者 今井 秀
今井整形外科雲海士流について
發表者 松岡尚則
公益財團法人研醫會

二〇二二年三月二日 司會 長野 仁
室町期における醫學・醫書受容
の一樣相——五山僧が繋ぐ知の
ネットワーク——
發表者 田中尚子
愛媛大學

『倭名類聚抄』における『本草
和名』の引用
發表者 武 倩
中國海洋大學外國語學院
翻譯と導入——中國南北朝期の佛
教と醫學 發表者 多田伊織
大阪府立大學
江戸時代醫學公教育を取り巻く
經穴學派の諸相
發表者 加畑聰子
北里大學東洋醫學總合研究所

修・永塚憲治編集『二本堂南洋先生 門人録 増補
版』（人名索引の補正及び附録として新出資料
『修庵香川先生易辨』の影印・翻刻および解題
（武田時昌）として刊行した。班員によるこれま
での研究成果をまとめた論文集を來年度に刊行す
るための準備も進めている。

二〇二〇年十二月二〇日 鍼灸流儀書の再検討

『五身身分抄』および『百腹圖
說』『五十腹圖說』の考察
司會 高井たかね

榮西と桑粥——平安中期から鎌
倉期の糖尿病史——
發表者 富田貴洋

湧貴堂鍼灸院『百腹圖說』『五
十腹圖說』の書誌的考察
發表者 長野 仁

二〇二二年二月三日 醫學・鍼灸各流派の成
立と傳承（二） 粕谷流と杉山
流 司會 高井たかね
粕谷流の流儀書について、雲海
士流・扁鵲新流との關係性、
發表者 松木宜嘉

森ノ宮醫療大學大學院

發表者 松木宜嘉

江戶時代醫學公教育を取り巻く
經穴學派の諸相
發表者 加畑聰子

北里大學東洋醫學總合研究所

二〇二一年 三月刊行

近世醫家新出史料集Ⅰ 武田時昌監修・長野仁編集『改訂版 儒醫姓名録——後藤良山門人録の影印・翻刻』（長野仁解説の加筆訂正）
 近世醫家新出史料集Ⅱ 武田時昌監修・永塚憲治編集『一本堂南洋先生 門人録 増補版』（人名索引の補正及び附録として新出資料『修庵香川先生易辨』の影印・翻刻および解題（武田時昌））
 研究成果の概要 研究開始当初は現存最古の鍼道傳授書である『針聞書』を考究対象に取り上げ、著者である茨木元行が唱えた今新流の傳播を追跡し、近世鍼術の流派がどのように分岐していったのかを系譜づけながら、その著作に圖解されたハラノムシの病理觀や治療法、診斷術をめぐる諸問題を討議した。また、『五體身分抄』『五體身分集』という中世の抄物醫書について、『醫心方』から『福田方』に至る間の空白を埋める資料的價値を見出し、東京國立博物館資料館等の資料調査を行うとともに、研究会で討議した。そのほか、特別講師や班員の研究發表を通して、近世社會に大いに發達した針術、灸法について適切的な考察を試み、その源流と發展の具體的様相を探ることができた。本研究班での研究成果は、二〇二〇年一月十二日に北里大學で開催された第7回鍼灸醫學史研究發表會で『五體身分抄』『五體身分集』に關する研究發表（長野仁、富田貴洋の共同發表）を行ったほか、明智光秀の『針藥方』めぐっては、NHK京都放送局と連携した公開イベントを企畫して、二〇二〇年二月八日に芝蘭會館山内

ホールにて開催し、研究期間中に廣く一般にも公開することができた。また、本研究による史料發掘と研究調査の成果として、後藤良山、香川南洋の門人録をはじめとする新出資料について、その影印版を解題、索引等を附し、近世醫家資料集として三冊を本年度末に刊行する豫定である。
 「見えるもの」や「見えないもの」に關わる東アジアの文物や藝術についての學際的な研究

班長 外村 中

本年度も班長の年間四度の來日に合わせて四回の研究会（六月・九月・十二月・三月）を實施する計畫を立てたが、コロナ禍で六月の第一回は八月に延期となり、最終的にオンラインで開催した。第二回以降も班長は資料蒐集のため來日を要したが、結果的に二週間の待機を経て研究所で副班長とともにオンラインで開催した。第二次の本年度は佛典のほか儒・道の基本文獻にも視野を擴げ、第一回は淨土三部經、第二回は『淮南子』『呂氏春秋』『易經』など、第三回は『老子』『莊子』『管子』『韓非子』『列子』などの文獻とこれと關連する作品について検討を行った。班長入國時の待機にかかる滞在費で大幅な豫算超過が生じたため、三月開催分は通例の研究会ではなく當班の關連企畫として、儒・道・佛に日本神道を加えた四宗教の交渉をテーマにしたオンライン形式の國際ワークショップ「中國三教と日本神道の「見える」ものや「見えない」もの」を公開で開催した。當日は班長・副班長及び班員二名、計四名による研究發表と質疑應答が行われ、五〇名の参加者が

あった。

二〇二〇年 八月二二日 淨土三部經などと關連作品

宋代佛畫の「展開點」としての清淨華院「阿彌陀三尊像」——見える畫像から見えない畫像

發表者 増記隆介
 神戸大學

鏡像の考察——圖像を見いだす

發表者 瀧 朝子
 大和文華館

二〇二〇年 八月二三日 淨土三部經などと關連作品「淨土三部經」などが説く「見える」ものや「見えない」もの

西方淨土變は阿彌陀淨土を描いたものではない

發表者 外村 中
 ヴェルツブルク大學

「見える」淨土を「観る」——唐代西方淨土變と道綽

發表者 大西磨希子
 佛教大學

二〇二〇年 九月十九日 『淮南子』『呂氏春秋』『易經』などと關連作品『淮南子』が説く「見える」ものと「見えない」もの——道はまったく「見えない」もの——

發表者 外村 中

漢代神仙思想と像の崇拜

発表者 森下章司
大手前大學
二〇二〇年 九月二〇日 『淮南子』『呂氏春秋』『易經』などと関連作品見えない天意を何に見たか——正史五行志の役割

発表者 塚本明日香
岐阜大學
墓の中の「見えるもの」と「見えないもの」——漢魏晉墓の神坐と墓主圖像——

発表者 向井佑介
二〇二〇年十二月二六日 『老子』『莊子』『管子』『韓非子』『列子』などと関連作品 外村 中
道家(老莊)が説く「見える」ものや「見えない」もの…「一なる」ものこそ「道」である

発表者 外村 中
后稷は天に配せられたのか——『詩』大雅「生民」から『孝經』へ

発表者 古勝隆一
二〇二〇年十二月二七日 『老子』『莊子』『管子』『韓非子』『列子』などと関連作品 中國飲食史における〈炒める〉〈揚げる〉をめぐる——『齊民要術』から元代まで

発表者 高井たかね

醫家と道家の體內觀

発表者 横手 裕
東京大學
二〇二一年三月二八日 國際ワークショップ.. 中國三教と日本神道の「見える」ものや「見えない」もの道家系と儒家系と伊勢神道の「二なる」もの…「一なる」ものは「道」か「氣」か

発表者 外村 中
佛像と道教像の圖像的關係性再考——南北朝〜唐時代——

発表者 齋藤龍一
大阪市立美術館
道學諸派における『太極圖說』解釋 發表者 福谷 彬
北宋眞宗期の佛教美術と三教理解——舍利莊嚴を中心に——

発表者 稲本泰生
システム内存在としての世界についてのアートを媒介とする文理融合的研究 班長 三輪眞弘
本年度は四回のズーム研究會のほかに、これまでの議論を觸媒として制作されたオンライン・イベント「ぎふ未来音楽展二〇二〇三輪眞弘祭——清められた夜——」(九月十九日)をライブ配信し、「集えない時代」の意味を問うた。このイベントは特設サイトを設けた(英語版もあり)。當日リアルタイムのみの中継であったが、視聴回数は三一五六、全體の五%が海外からの視聴だった

発表者 藤井俊之

(アメリカ、インドネシア、ドイツ、イギリス、オーストラリア、臺灣など)。また公演當日のウェブサイトを訪問者は二五八三人(のべではなく、個別ユーザ数)、ページビュー数九八一九回である。また八月二八日にはオンラインでプレイベント「プロローグ「音楽の終わりの終わり」は、ここからはじまる——」を中継した。また研究班での議論に基づく論考『第九』——再び抱き合えるか——(八月四日朝日新聞朝刊全國版・論考)を發表、また三輪のイベントとセットの形で九月に發行された『音楽の危機』(中公新書)は四大新聞を含む十五を超えるメディアの書評等で取り上げられ、一月一日(二二時)のNHK・FMで坂本龍一により紹介された。また三輪と岡田による動畫「コロナ時代の未来の音楽」を制作してYouTubeにアップした。なお九月十九日のイベントは朝日新聞十二月十七日「二〇二〇年の回顧」欄(音楽)において片山杜秀氏により「今年の三點」に選ばれた。さらには九月の公開イベントが『佐治敬三賞』に、そして公開イベントを対象として三輪眞弘が「サントリー音楽賞」に選ばれるという、ダブル受賞の快挙を成し遂げた。

二〇二〇年 六月 五日 オンラインによる音楽はいかにして可能か?

二〇二〇年 六月二一日 ルーマン社會學紹介 發表者 藤井俊之

二〇二〇年 八月二八日 ぎふ未来音楽展二〇二〇

二〇二〇年 八月二八日 ぎふ未来音楽展二〇二〇

二〇三輪眞弘祭プレトークライブ配信 発表者 三輪眞弘

情報科学芸術大学院大学

コメンテーター 岡田暁生

コメンテーター 前田眞二郎

情報科学芸術大学院大学

コメンテーター 松井 茂

情報科学芸術大学院大学

二〇二〇年 八月三〇日 プレトーク総括討論

発表者 岡田暁生

二〇二〇年 九月十九日 ぎふ未来音楽展二〇

二〇三輪眞弘祭——清められた夜ライブ配信

発表者 三輪眞弘

情報科学芸術大学院大学

発表者 松井 茂

情報科学芸術大学院大学

発表者 前田眞二郎

情報科学芸術大学院大学

二〇二〇年十一月一日 動画『コロナ時代の

未来の音楽』制作

発表者 三輪眞弘

情報科学芸術大学院大学

コメンテーター 岡田暁生

二〇二〇年 三月 二日 人工生命とバイオ

アートをめぐって

発表者 岩崎秀雄

早稲田大学

清代〜近代における經學の斷絶と連續…目録學の視角から 班長 竹元規人

本研究班は、『文史通義』の會讀・ならびに譯注作成を通じ、清朝學術のありかたを解明することを目的としており、本年度は同書卷四の「匡謬篇」から讀解を進め、一月二十日現在、同卷の「砭俗篇」までの譯注稿を作成し終えた。年度末までには、卷四を讀了したうえで卷五を讀み始める。

また本年度は、本研究班に先行する研究班『文史通義』研究」班の成果として、『文史通義』

卷三の譯注を完成させ、『東方學報』第九五號(二〇二〇年十二月)に掲載した。さらに、三月十四日に、研究班主催の國際シンポジウムを開催し(Zoomを使用したオンライン會議)、臺灣・日本の研究者に講演を依頼する豫定である。そのほか、二月初旬には、小型のオンライン研究會を豫定しており、中國の若手研究者に研究發表を行ってもらい、班員の知見を広めることとしている。

二〇二〇年 五月十九日 『文史通義』卷四會

讀 匡謬篇(1)

古勝隆一

二〇二〇年 六月 二日 『文史通義』卷四會

讀 匡謬篇(2)

古勝隆一

二〇二〇年 六月十六日 『文史通義』卷四會

讀 匡謬篇(3)

古勝隆一

二〇二〇年 七月 七日 『文史通義』卷四會讀

質性篇(1)

臧 魯寧

京都大學文學研究科

二〇二〇年 七月二日 『文史通義』卷四會

讀 匡謬篇(2)

内山直樹

二〇二〇年 十月 六日 『文史通義』卷四會

讀 點陋(1)

小島明子

二〇二〇年 十月二十日 『文史通義』卷四會

讀 點陋(2)

新潟大學

二〇二〇年十一月十七日 『文史通義』卷四會

讀 點陋(3)

成田健太郎

二〇二〇年十一月十五日 『文史通義』卷四會

讀 俗嫌

道坂昭廣

二〇二〇年十二月一日 『文史通義』卷四會

讀 俗嫌

永田知之

二〇二〇年十二月十五日 『文史通義』卷四會

讀 臧名

竹元規人

二〇二〇年 一月十九日 『文史通義』卷四會

讀 臧名

福岡教育大學

二〇二〇年 二月 二日 『文史通義』卷四會

讀 臧名

福岡教育大學

二〇二〇年 二月 二日 『文史通義』卷四會

讀 臧名

福岡教育大學

二〇二〇年 二月 七日 『文史通義』研究報告會①「章學誠の文集論與清代

學人文集編纂」

發表者 林 鋒

二〇二二年 三月十四日 『文史通義』 研究報告

會② 「中國學術史と文獻學——
章學誠の學術構想を起點とし
て」
發表者 張 壽安、
嘉瀬達男、永富青地

臺灣中央研究院近史所研究員、
小樽商科大学言語センター教授、
早稻田大学創造理工学部教授
「日本の傳統文化」を問い直す 班長 重田みち
本年度は五回（うち一回は三月開催予定）の研究會と一回のシンポジウムをした。藝能史、美術史、音楽史、禪思想史などの分野の研究報告のほか、基本文獻の會讀、方法的検討などを實施した。

二〇二〇年 五月三十一日 問題提起「日本の傳統文化」とはどういうものかとされてきたか…鈴木大拙と久松眞一の著作をとおして
發表者 重田みち
京都藝術大学

二〇二〇年 七月十九日 リーディング…宮本常一・村井康彦・守屋 毅「共同討議…雑談」
發表者 菊地 暁
日本中世の諸藝と道學——發端としての世阿彌能樂論

發表者 重田みち
コメントーター 福谷 彬

二〇二〇年 九月十三日 一九三七年パリ萬國博覽會における「日本の傳統」を考ふる 發表者 高階繪里加

コメントーター 宮崎涼子
京都藝術大学
茶禪一味説をめぐって
發表者 神津朝夫
立命館大学

二〇二〇年十二月 六日 『宗鏡錄』の成立と傳播…中國禪による佛教の統合と日本への影響
發表者 柳 幹康
花園大学
コメントーター 古勝隆一
近世音楽藝能における異相と外來文化 發表者 竹内有一
京都市立藝術大学

コメントーター 今枝杏子
神戸女学院大学

二〇二二年 一月 十日 シンポジウム…「日本の傳統文化」を問い直す 漢字圈古醫籍の定量・比較研究——その異・同と社會經濟背景
發表者 眞柳 誠
茨城大学
日本繪畫の向こう側——中國繪

畫史からの視點

發表者 宮崎法子
實踐女子大学
異文化として日本を眺める——ヨーロッパ近世の眼差しとキリシタン時代の布教活動
發表者 シルヴィオ ヴイータ
京都外國語大学

二〇二二年 三月二一日 室町時代後期に何故繪入り冊子本が登場したのか？
發表者 佐々木孝浩
慶應義塾大学
司會 重田みち、古勝隆一
京都大學文學部

コメントーター 王孫涵之
京都大學文學部
中世の巡禮僧と民衆社會——可能思想としての外來佛教——
發表者 上川通夫
愛知縣立大学

コメントーター 菊地 暁
實驗性の生態學——人新世における多種共生關係に關する比較研究 班長 モハーチ・ゲルゲイ
初年度である本年度は、コロナ禍という状況の中で、全ての共同研究會をリモート形式（Zoom）にて實施してきた。班員全員が参加できることを最優先に、六回の共同研究會の一部を合併して、合計四日で開催されました。第一回共同研究會での班長（モハーチ）と副班長（石井）による本共同研究の趣旨説明のあと、第二〜第六回共同

研究会を通じて、「実験性」の概念を近年増加しつつある自然環境と人間社会とのかわりあいに關する人文・社會科學的研究の中で位置付けるため、所内外の班員によるレビュー文獻の解讀と、実験性の人類學（石井）、社會學（モハーチ）、歴史學（瀬戸口）、科學技術社會論（鈴木、モハーチ）などの分野における近年の研究動向に關する發表と討論を中心に研究活動を進めました。若手研究者などのゲストも交えて廣く議論を行い、今後の國際的なネットワーク構築に不可欠な知識を得る活動を試みました。本年度の最後の共同研究会では、來年度の中間成果發表に向けて、具體的な内容について議論を開始しました。また、今後の執筆や議論などの共同作業のツールとして、本共同研究のウェブサイトを開設しました。

二〇二〇年 七月十一日 実験性の生態學・人新世における多種共生關係に關する比較研究 共同研究の趣旨説明

実験性の生態學・人新世における多種共生關係に關する比較研究 發表者 石井美保、モハーチ・ゲルゲイ

二〇二〇年 九月二十八日 実験性の生態學・人新世における多種共生關係に關する比較研究 実験性の生態學・土臺と限界 發表者 モハーチ・ゲルゲイ

実験性の生態學・人新世における多種共生關係に關する比較研究 Traps and Experimental Systems 發表者 鈴木和歌奈、日本學術振興會PD

二〇二〇年十一月二十八日 実験性の生態學・人新世における多種共生關係に關する比較研究 自然保護、實驗生政治 發表者 石井美保

二〇二一年 二月二二日 実験性の生態學・人新世における多種共生關係に關する比較研究 實驗室からフィールドへ 發表者 瀬戸口明久、班長 諫早直人

東アジア馬文化の研究

本研究班では、二〇二〇年度に三回の研究会を實施した。七月の第一回研究会では、ユーラシア草原地帯における馬利用の開始とその東方擴散について、研究報告と議論をおこなった。馬骨・齒の變形・摩耗狀況やDNA分析、車や馬具の出土狀況などから、前四千年紀から前三千年紀にかけて、ユーラシア各地で馬の家畜化と利用が進められていく狀況が示された。十二月の第二回研究会では、中國魏晉南北朝時代の馬文化をテーマとして、二本の研究報告をおこなった。まず、これまでに整理してきた中國の魏晉南北朝墓出土の陶馬や馬車・牛車明器のデータをもとに、文獻史料と對比しながら、馬車と牛車の關係、鞍馬の役割、馬具の變化などを議論した。續いて、おもに五世

紀の墓室壁畫・漆棺畫などの圖像史料、および墓出土の動物骨をもとに、中國北朝の騎馬遊牧文化について検討を進めた。二月の第三回研究会では、日本古代の馬文化に着目し、おもに文獻史料にもとづき古代の馬政について議論した。

二〇二〇年 七月 三日 ユーラシア草原地帯の馬文化 馬利用の開始と東方擴散 發表者 中村大介

二〇二〇年十二月十八日 中國魏晉南北朝の馬文化 魏晉南北朝の「馬備」について 發表者 大平理紗、京都府立大學

考古・圖像資料からみた北朝の騎馬・遊牧文化 發表者 向井佑介

二〇二〇年 二月十九日 古代日本の馬文化 日本古代の馬政の特質 發表者 佐藤健太郎、關西大學博物館

研究成果の概要 本研究では、一年の研究期間を通じて三回の研究会を實施し、それぞれユーラシア草原地帯、中國魏晉南北朝、日本古代の馬文化について、班員による研究報告と議論をおこなった。これにより、ユーラシアにおける家畜馬や馬車・騎馬利用の出現と展開の過程について近年の認識を共有することができた。また、東方の中國や日本列島における馬車・騎馬文化と馬匹生産の様相については、關係する考古資料と文獻史料を

集成・整理し、先行研究の到達点を追認するにとどまらず、鞍馬・馬車・牛車などの社会的役割や馬具の變化などいくつかの視點について、過去の研究とは異なる新たな認識を提示することができた。

西部講堂を中心とする戦後文化空間の研究

班長 朴 沙羅

研究目的の達成のために、1年を通して、西部講堂に關係した人々にインタビュウの実施を重ねて、彼らから當時の文獻の提供を受けること、戦後日本文化運動史、學生運動史における西部講堂および關係者の檢證をすすめた。また「21世紀の人文學」班や京大内の關連分野の研究者に積極的に聲をかけることで、インタビュウをより充實させるとともに、共同研究會で活發な議論を展開することができた。西部講堂の先行研究はこれまでなく、主に基礎を充實させるために本研究班の活動は割られたが、今後の研究において重要な作業を推し進めることができた。

二〇二〇年 六月二三日 新開純也へのインタビュウ

二〇二〇年 七月 十日 山中透へのインタビュウ

二〇二〇年 十月二二日 高瀬照美、新開純也、飯田俊の鼎談及びインタビュウ

二〇二〇年 十月二二日 新開純也へのインタビュウ

二〇二〇年 十月二二日 共同研究會及び今後の打ち合わせ

二〇二〇年 十月二三日 飯田俊へのインタビュウ

二〇二〇年 十月二三日 木村英輝へのインタビュウ

二〇二〇年 十月二三日 飯田俊へのインタビュウ

二〇二〇年 十月三〇日 シモーヌ深雪及びBUUへのインタビュウ

研究成果の概要 本共同研究は西部講堂の歴史を調査することを目的として資料収集及び聞き取り調査を精力的に行つた。その概要は以下の通りになる。二〇二〇年六月に新開純也に對して駒込武と本研究班員の田所大輔、福家崇洋が戦後京大學生運動について人文研で聞き取りを実施。七月十日には「21世紀の人文學」研究班と共催で人文研において、ダムタイプで音楽を擔當してきたDJ山中透へのインタビュウをI A M A Sの松井 茂と伊村靖子、本研究班員の伊藤存、田所、福家をインタビュウとして行つた。十月二一―二三日には飯田俊を東京より招いてインタビュウ及び共同研究會を実施した。十月二二日に今後の打ち合わせを行つたうえで、二二日午後には白樺において高瀬照美、新開純也、飯田俊で高瀬泰司及び西部講堂について鼎談及び田所、福家をインタビュウとしてインタビュウを実施した。そのあと人文研で新開純也に對して田所、福家が戦後京大學生運動につきインタビュウを実施した。同日夜には飯田、木下千花、小關 隆、本研究班から朴、伊藤、田所、福家のメンバーで西部講堂及び戦後

文化運動について共同研究を行い今後の方針などを協議した。十月二三日午前には人文研で飯田に對し戦後音楽文化につき田所、福家がインタビュウを実施、午後からはキーヤンスタジオで木村英輝に對して飯田、田所、福家で西部講堂及び戦後文化運動につきインタビュウを実施した。同日夕刻から人文研で飯田に對し福家が飯田所蔵の資料にもつきインタビュウを実施。十月三〇日には京大においてシモーヌ深雪、BUU、山中に對して田所、福家を今後の戦後京都文化のインタビュウに向けて打ち合わせ等を行つた。これらの聞き取り調査を行うなかで、西部講堂に關する新聞、雑誌、ピラなど多くの資料収集の提供を得た。また以上のインタビュウは録音させていたがき今後公開の許可を得られたものに關しては資料紹介のような形で學術雜誌等に投稿できればと考えている。

小津安二郎映畫の歐米における批評的受容に關する研究 班長 正清健介

二〇二〇年四月―九月は、班員それぞれが小津映畫を對象にした歐米の映畫批評を、圖書館や國立映畫アーカイブ等にて調査し、リストを作成した。役割分擔は次の通りである。正清と板井は佛國における映畫批評を調査した。特に正清は映畫批評誌『カイエ・ドゥ・シネマ』、板井は『ボジティブ』における小津映畫批評を調査し、その考察まで進めた。伊藤と宮本は英語圏の小津映畫批評を調査した。伊藤は英國の批評、宮本は米國の批評を調査し、リストを作成した。

二〇二〇年 九月十八日、オンライン(Zoome)

m)で第一回研究会を開催した。班員は発表者としてそれぞれ四月からの調査の報告を行った。またこれに合わせて、副班長森本はコメンテーターとしてそれぞれの報告に對してコメントをした。

十月～三月は、プロジェクト経費を活用し関係資料(書籍)を補いつつ調査で得た批評の讀解・考察を進めた。

二〇二二年 三月十二日、人文科學研究所内において第二回研究会を開催し、班員それぞれ研究成果の報告を行なった。

二〇二〇年 九月十五日 小津安二郎映畫の歐米における批評的受容に關する研究 フランス『カイエ』の小津映畫評 發表者 正清健介
一橋大學大学院言語社會研究科 フランス『ボジティブ』の小津映畫評 發表者 板井 仁
一橋大學大学院言語社會研究科 アメリカの小津映畫批評 發表者 宮本明子
同志社女子大學表象文化學部 イギリスにおける小津映畫批評 發表者 伊藤弘子
關西大學文學部

二〇二〇年 三月十二日 小津安二郎映畫の歐米における批評的受容に關する研究 フランスにおける小津映畫受容 發表者 正清健介
アメリカにおける小津映畫受容 發表者 板井 仁
イギリスにおける小津映畫受容 發表者 伊藤弘子
コメンテーター 森本淳生

研究成果の概要は次の通りである。
・佛語圏 フランスの映畫批評誌『カイエ・ドウ・シネマ』において一九六〇年代から八〇年代にかけて小津映畫を對象とした主な批評(作品評)は八本あった。その特徴は、作品と「日本的なもの」との關連を否定した上で、映畫スタイルの獨自性を主張するものだった。論は、映畫の映像と音聲の構成をめぐって展開する傾向にある。また新聞『ルモンド』において一九六〇年代から八〇年代にかけて小津映畫を對象とした主な批評(作品評・作家評)は六本あった。その特徴は、作品と「日本的なもの」あるいは小津個人のエピソードとの關連を指摘すると同時に、テーマ(家族愛など)の普遍性を主張するものだった。論は、物語とテーマをめぐって展開する傾向にある。以上のフランスの小津映畫批評は、一九八〇年代の小津映畫研究に大きな影響を興えていると推察される。

一方、映畫批評誌『ボジティブ』では、一九六〇年代から八〇年代にかけて、小津安二郎の映畫に關する批評は八本あった。批評の特徴は論者によって様々だが、作品の物語に沿うのではなく、そこから抽出したテーマを中心に論じている点にある。そこでは主に、①制限や抑制、禮儀作法といった、論者らが保守的・東洋的なものとして定義するもの、②東洋と西洋、大人と子どもといった二項の對立構造、③そうした對立構造の一方から他方への移行や、そこに現れるズレや逸脱に目を向けるもの、などがテーマとなっている。・英語圏 アメリカでは、一九五〇年代末から八〇年代にかけて、『Film Criticism』『Film Quarterly』などの學術雜誌に小津映畫に對する批評がみとめられる。その初期には、ドナルド・リチーが主に『Film Quarterly』において小津の紹介、批評を行っており、アメリカにおける小津の周知、議論の活性化に貢献したと考えられる。

イギリスに關しては、映畫雜誌『サイト&サウンド』を對象に、一九五七～一九八八年の範圍で小津安二郎に關する批評的言説を調査した。小津の名前に言及している號は六六號、言及のあるページ總數は一五三ページに及ぶ。「日本的な監督」というステレオタイプに基づいた紹介が多く見られるなか、詳細なテクスト分析に基づく本格的な小津論も確認された。そのうちの何本かの記事は、日本語に翻譯して刊行する價值があると思われる。

東アジアにおける阿彌陀如來の表象

班長 高橋早紀子

東アジアにおける阿彌陀如来の表象についての考察を通じて、阿彌陀如来に對する多様な思想や信仰の一端を追究すべく、二回の研究討論會十一月七日・十二月五日／Zoomによるオンライン實施／参加者約六〇名）を開催した。第一回の研究討論會「日本の佛教彫刻——作品生成の場」は、高橋とゲストスピーカーの山口隆介氏（奈良國立博物館）、三田覺之氏（東京國立博物館）を發表者とし、第二回の研究討論會「尊像の姿と作用——阿彌陀佛と四天王を例に」は、班員の田中健一氏（文化廳）、高志緑氏（日本學術振興會）、檜山智美氏（京都大學）、ゲストスピーカーの佐藤有希子氏（奈良女子大學）を發表者とし、班員以外の當該テーマに關心をもつ研究者にも公開した。いずれも、当日は約六〇名が参加し、最新の知見に基づき活発な質疑應答が行われた。

二〇二〇年十一月七日 日本の佛教彫刻——作品生成の場 廣隆寺講堂阿彌陀如来・地藏菩薩・虚空藏菩薩坐像と道昌 發表者 高橋早紀子

愛知學院大學

快慶の阿彌陀佛造像 發表者 山口隆介

奈良國立博物館

法隆寺金堂における四天王の世 發表者 三田覺之

東京國立博物館

二〇二〇年十二月五日 尊像の姿と作用——阿

彌陀佛と四天王を例に 飛鳥時代の阿彌陀造像 發表者 田中健一

文化廳

懺法との関わりから見た阿彌陀像——淳熙十年銘「阿彌陀淨土圖」を中心に 發表者 高志緑

學振特別研究員・人文科學研究所

西域北道の佛教石窟壁畫に描かれた四天王とその眷屬の圖像 發表者 檜山智美

中世繪卷に表された毘沙門天像（補足・質疑）

發表者 佐藤有希子

奈良女子大學

研究成果の概要 年度内に二回企畫した研究討論會では、若手研究者によって東アジアにおける阿彌陀如来の表象に關する最新の調査・研究成果が發表され、約六〇名の参加者とともに多様な表象・思想・信仰について實りある討論を行うことができた。Zoomによるオンラインの公開研究會の実施には不安もあったが、全国各地・海外から多くの研究者の参加が得られ、充實した研究討論會となった。本研究討論會での成果を取り込んだ論文2件（山口隆介「兵庫・淨土寺裸形阿彌陀如来立像」『鹿園雜集』二三、高橋早紀子「廣隆寺講堂阿彌陀如来像の造像背景と道昌」『京都美術史學』二）が、年度内に刊行される豫定である。

また、本研究班の目指す持続可能な若手研究者の學術ネットワークの構築についても、二回の研究討論會の企畫・實施を通して一定の成果が得られた。

「長い19世紀」におけるインド・中國の社會經濟史の比較——税制に注目して 班長 小川道大
本年度は對面の研究會を豫定していたが、全てオンラインとなった。四月二五日に第一回研究會を開催し、世界經濟史會議パリ大會（WEHC 2022）に應募するパネルの内容について検討を行った。その結果、巨大國家における資源配分をテーマにして土地制度、財政、航運、金融、商業を検討する（コンラッド）、「Resource Distribution in the Mega-states with Small Governments: A Comparison between China and India, 1750-1950」というタイトルで申請することを決定した。九月十八日には第二回研究會を開催し、社會經濟史學大會で實施するパネルについて、「趣旨説明」を村上、「空間・分配・秩序：土地制度をめぐる中印比較」を田口・小川、「工場労働者をめぐる中印比較」を神田・富澤、「中印海域ネットワークの比較分析——ボンベイと香港を中心に——」を木越が報告して討論を行った。

二〇二〇年 四月二五日 中印比較史の今後の計畫について 發表者 村上 衛

二〇二〇年 九月十八日 轉換期「巨大國家」における資源配分・中國・インドの土地・労働力・航運趣旨説

明 發表者 村上 衛
空閑・分配・秩序・土地制度を
めぐる中印比較

發表者 田口宏二朗

大阪大學

發表者 小川道大

金澤大學

工場労働者をめぐる中印比較

發表者 神田さやこ

慶應大學

發表者 富澤芳亞

島根大學

中印海域ネットワークの比較分

析・ボンベイと香港を中心に

發表者 木越義則

名古屋大學

研究成果の概要 オンラインの開催ではあったが、
二回の研究会を通じて、中國史研究者・インド史
研究者とも相互の歴史に對する理解をいっそう深
めることができた。中印の共通項として巨大國家
であることのみならず、清朝やムガル帝國、イギ
リス東インド會社といった外來の勢力の統治を受
けたものの、既存の制度も根強く残りハイブリッ
ドな國家であったことなどがあらためて確認され
た。一方で、人口變動など、中印に大きな違いが
あることも確認できた。また、中印の比較史にあ
さわしいテーマは、土地制度・労働力・航運・財
政・金融・商業に絞り込むことができた。これら
のテーマについてはそれぞれの擔當者によって比

較の作業が進展しており、中印の共通點と相違點
も明らかになりつつある。本年の社會經濟史學會
大會、來年の世界經濟史會議においてその成果を
報告する準備もとのつた。

東方學研究部

チベット文明の繼承と史的展開の諸相

班長 池田 巧

最終年度に當たる本年度は、大きく分けて以下
の二つの活動を中心に實施した。

(1) 本研究班の活動成果を反映した概論「チ
ベットの歴史と社會」(宮尾一史・池田巧「共編」
臨川書店)の刊行に向けて、編集會議と必要な修
訂作業を繼續して行った。(2) 研究動向の把握
と研究情報交換を目的としてZoomによる研究
會議を開催した。(1)については諸般の事情か
ら内容の大幅な再編と調整の必要があり、編集作
業の遅れが出ていたが、今年度で無事に編集作業
を終え、年明け年度内に刊行した。(2)につい
ては、班員からの話題提供により、

*チベットの地理情報と地圖について

*チベットに傳わる日本人の起源傳説について

*チベット語典籍史料における時代區分の意識
といった研究報告と討論を行った。

二〇二〇年 十月十七日 チベット研究の諸問
題 チベットの地圖製作と地理

情報について

發表者 池田 巧

二〇二〇年十一月二日 チベット研究の諸問

題 チベットにおける日本人の
起源傳説について

發表者 池田 巧

二〇二〇年十二月十二日 チベット研究の諸問

題 チベット語典籍史料におけ

る時代區分の意識——「サキャ

派時代」と「パクモドゥ派時

代」

發表者 山本明志

二〇二一年 一月二三日 チベット研究の諸問

題「チベットの歴史と社會」口

繪寫真ページの構成について

發表者 池田 巧

二〇二一年 二月十三日 チベット研究の諸問

題「チベットの歴史と社會」刊

行記念ウェブセミナーの開催計

畫について

發表者 池田巧

二〇二一年 三月十九日 チベット研究の諸問

題 次年度人文研アカデミー..

ウェブセミナーの開催方法につ

いて

司會 池田 巧、

柴田秀樹

研究成果の概要 日本のチベット學を構成する歴
史學、宗教學、人類學、言語學などの諸分野にお
ける優れた蓄積と成果を統合する學際的協力體制
の構築をめざし、將來における當該分野の發展の
礎を築くことを目標に研究活動を展開してきた。
そのうえで、チベット文明とは何かを相對的に記
述するべく最新の研究成果に基づく知見を手際よ

く整理して、日本のチベット學が何をどこまで明らかにしてきたのかを丁寧に論述した一般向けの概論書を刊行した。

近現代中國の制度とモデル 班長 村上 衛

本年度は三年計畫の一年目にあたり、当初は中堅以上、夏からは若手の報告を中心に實施した。新型コロナウイルスの感染拡大により、当初はオンラインで、感染縮小期にはオンラインとハイブリッドの併用で、計十五回の研究會を行い、そのうち一回は海外(ロンドン)からの報告となった。對面の場合は學内の参加者が多数を占めたが、オンライン化により、國內のみならず、海外の参加者も増加し、先行する研究班の参加者数が二〇〇二五人ほどであったのに對して、今年度の参加者数は平均で四〇人に達した。コメンテーターは専門を重視して遠方からの招聘も豫定していたが、今年度は多くがオンライン参加となった。いずれの報告に關しても、遠方の参加者からコメントをいただけるのがオンライン開催の大きなメリットとなった。なお、本研究班と關連して、現代中國研究センターでは合評會を共催した(二〇二〇年八月二二日、岩井茂樹著『朝貢・海禁・互市——近世東アジアの貿易と秩序』)。

二〇二〇年 五月十五日 近現代中國の制度と

モデル「近現代中國の制度とモデル」班をはじめに於たつて

發表者 村上 衛

誰が人々を導くのか——世紀轉換期の香港における死體遺棄を

めぐつて 發表者 小堀慎悟

文學研究科

二〇二〇年 五月二九日 近現代中國の制度

とモデル Ideology and Institutions: a new interpretation and periodization of economic changes in Modern China 1840-

1950 發表者 Debin Ma

一橋大學

二〇二〇年 六月十二日 近現代中國の制度と

モデル 一九二〇年代上海周邊での涉外民事訴訟・特に破産處理と株主の有限責任に關連して

發表者 本野英一

早稲田大學

二〇二〇年 六月二六日 近現代中國の制度と

モデル 近代長江中游船民與木帆船航運業研究

發表者 陳 瑤

廈門大學

二〇二〇年 七月 十日 近現代中國の制度と

モデル 民國期出版統計の復

發表者 比護 遙

教育學研究科

二〇二〇年 十月 九日 近現代中國の制度と

モデル 見逃す神話・一九二〇年代における中國のナシヨナリズムとジェンダー

發表者 楊 韜

佛敎大學

二〇二〇年 十月二三日 近現代中國の制度と

モデル 現代中國の中央集權制と黨内コミュニケーション・中國共產黨の「請示報告制度」を中心に(一九四八—一九五四年)

發表者 周 俊

早稲田大學

二〇二〇年 十一月 六日 近現代中國の制度と

モデル 明清交替期における社會と政權・福建汀州府寧化縣を中心に

發表者 梁 鎮海

文學研究科

二〇二〇年 七月 十日 近現代中國の制度と

モデル 民國期出版統計の復

發表者 羅 亞妮

文學研究科

二〇二〇年十一月二〇日 近現代中國の制度と

モデル十九世紀の東南アジア・
中國間の貿易ダイナミクス・
米・銀・爲替の流通に着目して

發表者 小林篤史

東南アジア地域研究所

コメンテーター 岸本美緒

東洋文庫

二〇二〇年十二月 四日 近現代中國の制度と

モデル 壬寅奇災下の災害救
済…宣教師関連資料を手がかり
に

發表者 土肥 歩

同志社大學

コメンテーター 山本 眞

筑波大學

二〇二〇年十二月十八日 近現代中國の制度と

モデル 米國宣教師W. R. ラ
ンバスと中國——清末上海から
のグローバル布教とそのモデル

發表者 川西孝男

關西學院大學

二〇二〇年 一月二二日 近現代中國の制度と

モデル 日中戦争期における中
國法學界 發表者 久保茉莉子

成蹊大學

コメンテーター 高見澤磨

東京大學

二〇二〇年 二月 五日 近現代中國の制度と

モデル 民國期における災害と
救済景観 發表者 黃 崢崢

人間・環境學研究所

コメンテーター 堀地 明

北九州市立大學

二〇二〇年 二月十九日 近現代中國の制度と

モデル 創刊から發達の道へ…
在華日系漢字紙『盛京時報』が
歩んできた最初の二〇年

發表者 徐 璐

文學研究科

コメンテーター 上田貴子

近畿大學

二〇二〇年 三月 五日 近現代中國の制度と

モデル 蒲豊彦著『鬪う村落
——近代中國華南の民衆と國
家』合評會 發表者 高橋伸夫

慶應大學

發表者 丸田孝志

廣島大學

發表者 都留俊太郎

東方文化學院京都研究所舊藏漢籍の整理と研究

班長 矢木 毅

毎週水曜日、一四時より一六時まで。(四月中
は休會。本年度はオンラインで開催)。前期は五
月十三日より七月二九日まで(計十二回)。後期
は十月十四日より二月三日まで(計十五回)。通
年で二十七回開催。本年度は集部別集類の漢籍を
検討した。毎回の検討の成果は「典據情報」とし

てまとめ、「全國漢籍データベース」にリンクさ
せた形でウェブ上に公開している。なお、関連す
る成果として『京大人文研藏書印譜(四)』と題
する圖録(東方學資料叢刊第二八册)を東アジア
人文情報學研究センターより刊行し、リポジトリ
「紅」においても公開した。

二〇二〇年 五月十三日 東方文化學院京都研

究所漢籍目録 集部別集類南宋
之屬 發表者 矢木 毅

二〇二〇年 五月二〇日 東方文化學院京都研

究所漢籍目録 集部別集類南宋
之屬 發表者 矢木 毅

二〇二〇年 五月二七日 東方文化學院京都研

究所漢籍目録 集部別集類南宋
之屬 發表者 矢木 毅

二〇二〇年 六月 三日 東方文化學院京都研

究所漢籍目録 集部別集類南宋
之屬 發表者 矢木 毅

二〇二〇年 六月 十日 東方文化學院京都研

究所漢籍目録 集部別集類南宋
之屬 發表者 宮宅 潔

二〇二〇年 六月十七日 東方文化學院京都研

究所漢籍目録 集部別集類南宋
之屬 發表者 宮宅 潔

二〇二〇年 六月二四日 東方文化學院京都研

究所漢籍目録 集部別集類南宋
之屬 發表者 宮宅 潔

二〇二〇年 七月 一日 東方文化學院京都研

究所漢籍目録 集部別集類南宋

二〇二〇年	七月 八日	東方文化學院京都研 究所漢籍目録	集部別集類南宋 之屬	發表者 宮宅 潔
二〇二〇年	七月十五日	東方文化學院京都研 究所漢籍目録	集部別集類南宋 之屬	發表者 高井たかね
二〇二〇年	七月二二日	東方文化學院京都研 究所漢籍目録	集部別集類南宋 之屬	發表者 高井たかね
二〇二〇年	七月二九日	東方文化學院京都研 究所漢籍目録	集部別集類南宋 之屬	發表者 高井たかね
二〇二〇年	十月十四日	東方文化學院京都研 究所漢籍目録	集部別集類南宋 之屬	發表者 永田知之
二〇二〇年	十月二二日	東方文化學院京都研 究所漢籍目録	集部別集類南宋 之屬	發表者 永田知之
二〇二〇年	十月二八日	東方文化學院京都研 究所漢籍目録	集部別集類南宋 之屬	發表者 永田知之
二〇二〇年十一月	四日	東方文化學院京都研 究所漢籍目録	集部別集類金元 之屬	發表者 福谷 彬
二〇二〇年十一月十八日		東方文化學院京都研 究所漢籍目録	集部別集類金元 之屬	發表者 福谷 彬
二〇二〇年十一月二五日		東方文化學院京都研 究所漢籍目録	集部別集類金元 之屬	發表者 福谷 彬
二〇二〇年十二月二日		東方文化學院京都研 究所漢籍目録	集部別集類金元 之屬	發表者 福谷 彬
二〇二〇年十二月九日		東方文化學院京都研 究所漢籍目録	集部別集類金元 之屬	發表者 藤井律之
二〇二〇年十二月十六日		東方文化學院京都研 究所漢籍目録	集部別集類金元 之屬	發表者 藤井律之
二〇二〇年十二月二三日		東方文化學院京都研 究所漢籍目録	集部別集類金元 之屬	發表者 藤井律之
二〇二〇年一月八日		東方文化學院京都研 究所漢籍目録	集部別集類金元 之屬	發表者 古松崇志
二〇二〇年一月十五日		東方文化學院京都研 究所漢籍目録	集部別集類金元 之屬	發表者 古松崇志
二〇二〇年一月二二日		東方文化學院京都研 究所漢籍目録	集部別集類金元 之屬	發表者 古松崇志
二〇二〇年一月二九日		東方文化學院京都研 究所漢籍目録	集部別集類金元 之屬	發表者 宮宅 潔
二〇二〇年二月三日		東方文化學院京都研 究所漢籍目録	集部別集類金元 之屬	發表者 宮宅 潔

研究成果の概要 毎回の會讀の成果を「典據情報」にまとめ、漢籍データベースの書誌情報にリンクさせた形でウェブ上に公開している。また藏書印については『京大人文研藏書印譜』と題する圖録のシリーズを東アジア人文情報學研究センターより刊行しており、本年度はその第四冊を刊行した。

漢籍リポジトリの基礎的研究

班長 ウィットイルン・クリスティアン
今年度は漢籍リポジトリに九十點の漢籍を追加した。利用者からの要望に応じて漢籍リポジトリ本體のファイル形式などの改善可能な點についての検討が行った。その結果としては新しい機能と現行のリポジトリの兩立を考慮して、これから實行可能な運營形態を検討しました。その結果としては基本的には漢籍リポジトリをそのままの運營を續ける上で、新しい形のXML版に基づいて別途のAPIとインタフェースを立ち上げることが望ましいという結論を得た。今年度はその形式の基本的な枠組に必要なを作成して、GitHubで公開しました。

關連プロジェクトとしては「漢學文典」(通稱 T L S、Thesaurus Linguae Serciae)の支援も繼續した。具體的にはプリンストン大學の東アジア研究所(米國)とポーフム大學の中國傳統文化研究センター(ドイツ)との共同研究で「漢學文典」の新しい共同研究・共同作業のためのウェブサイト(hxwd.org)の構築と實驗運用をはじめました。

- 二〇二〇年 五月十二日 今年度の豫定
- 二〇二〇年 五月二十六日 次世代漢籍リポジトリに向けて (1)
- 二〇二〇年 六月 九日 次世代漢籍リポジトリに向けて (2)
- 二〇二〇年 六月十三日 Textual Communities & implementation of standard markup
- 二〇二〇年 七月十四日 The concept of work in digital texts
- 二〇二〇年 十月十三日 Details of KanripoX format
- 二〇二〇年 十月十七日 KanripoX development (1)
- 二〇二〇年十一月四日 Japanese Buddhist Manuscripts (Gaetan Rappo)
- 二〇二〇年十二月八日 KanripoX development (2)
- 二〇二一年 一月十一日 Updates to KanripoX files
- 二〇二一年 一月二十六日 About the final report

に應じて漢籍リポジトリ本体のファイル形式についての検討を行った。その結果として新しい機能と現行のリポジトリの兩立を考慮して、これから実行可能な運営形態を検討しました。その結果としては基本的には漢籍リポジトリをそのままの運営を続ける上で、新しい形のXML版に基づいて別途のAPIとインタフェースを立ち上げることが望ましいという結論を得た。今年度はその形式の基本的な枠組に必要なを作成して、GitHubで公開しました。関連プロジェクトとしては「漢學文典」(通稱 T L S, Thesaurus Linguae Sérica) の支援も継続した。具体的にはプリンストン大學の東アジア研究所(米國)とボーフム大學の中國傳統文化研究センター(ドイツ)との共同研究で「漢學文典」の新しい共同研究・共同作業のためのウェブサイト (lxwd.org) の構築と實驗運用をはじめました。

秦代出土文字史料の研究 班長 宮宅 潔
 里耶秦簡・嶽麓簡の概要を紹介し、その内容や研究状況について意見を交換したうえで、會讀を進めた。今年度は新型コロナウィルスの感染拡大により、四月初めより研究會をオンラインでの開催に切り替えた。それにより會讀は途切れることなく進み、計畫通り三月末までに四十二回の研究會を開催した。

- 二〇二〇年 四月十七日 嶽麓簡會讀 288-296 發表者 目黒杏子
- 二〇二〇年 四月二四日 嶽麓簡會讀 257-267 發表者 安永知晃 關西學院大學
- 二〇二〇年 五月 一日 嶽麓簡會讀 257-267 發表者 安永知晃
- 二〇二〇年 五月 八日 嶽麓簡會讀 257-267 發表者 安永知晃
- 二〇二〇年 五月十五日 嶽麓簡會讀 257-267 發表者 安永知晃
- 二〇二〇年 五月二二日 嶽麓簡會讀 257-267 發表者 安永知晃
- 二〇二〇年 五月二九日 嶽麓簡會讀 268-275 發表者 章 瀟逸 人間・環境學研究科
- 二〇二〇年 六月 五日 嶽麓簡會讀 268-275 發表者 章 瀟逸
- 二〇二〇年 六月十五日 嶽麓簡會讀 268-275 發表者 章 瀟逸
- 二〇二〇年 六月十九日 嶽麓簡會讀 268-275 發表者 章 瀟逸
- 二〇二〇年 六月二六日 嶽麓簡會讀 268-275 發表者 章 瀟逸
- 二〇二〇年 七月 三日 嶽麓簡會讀 268-275 發表者 章 瀟逸
- 二〇二〇年 七月 十日 嶽麓簡會讀 276-283 發表者 佐藤達郎 關西學院大學

- 二〇二〇年 七月十七日 嶽麓簡會讀 276-283 發表者 佐藤達郎
- 二〇二〇年 七月三十一日 嶽麓簡會讀 276-283 發表者 佐藤達郎
- 二〇二〇年 九月 四日 嶽麓簡會讀 276-283 發表者 佐藤達郎
- 二〇二〇年 九月十一日 里耶秦簡會讀 ⑧ 925-⑧ 959 發表者 宮宅 潔
- 二〇二〇年 九月十八日 嶽麓簡會讀 276-283 發表者 佐藤達郎
- 二〇二〇年 九月二十五日 里耶秦簡會讀 ⑧ 997-⑧ 1023 發表者 安永知晃
- 二〇二〇年 十月 一日 嶽麓簡會讀 284-293 發表者 西 眞輝
- 二〇二〇年 十月十六日 里耶秦簡會讀 ⑧ 997-⑧ 1023 發表者 安永知晃
- 二〇二〇年 十月三十一日 嶽麓簡會讀 284-293 發表者 西 眞輝
- 二〇二〇年 十月三十一日 里耶秦簡會讀 ⑧ 997-⑧ 1023 發表者 安永知晃
- 二〇二〇年 十一月 六日 嶽麓簡會讀 284-293 發表者 西 眞輝
- 二〇二〇年 十一月二〇日 里耶秦簡會讀 ⑧ 1024-⑧ 1048 發表者 章 瀟逸
- 二〇二〇年 十一月二七日 嶽麓簡會讀 294-302 發表者 角谷常子
- 二〇二〇年 十二月 四日 里耶秦簡會讀 ⑧ 1024-⑧ 1048 發表者 章 瀟逸
- 二〇二〇年 十二月十一日 嶽麓簡會讀 294-302 發表者 角谷常子
- 二〇二〇年 十二月十八日 里耶秦簡會讀 ⑧ 1024-⑧ 1048 發表者 章 瀟逸
- 二〇二〇年 一月 八日 嶽麓簡會讀 303-312 發表者 宗周太郎
- 二〇二〇年 一月十五日 里耶秦簡會讀 ⑧ 1049-⑧ 1073 發表者 西 眞輝
- 二〇二〇年 一月二十二日 嶽麓簡會讀 303-312 發表者 宗周太郎
- 二〇二〇年 一月二十九日 里耶秦簡會讀 ⑧ 1049-⑧ 1073 發表者 西 眞輝
- 二〇二〇年 二月 五日 嶽麓簡會讀 303-312 發表者 宗周太郎
- 二〇二〇年 二月十二日 嶽麓簡會讀 303-312 發表者 宗周太郎
- 二〇二〇年 二月二十六日 里耶秦簡會讀 ⑧ 1049-⑧ 1073 發表者 西 眞輝
- 二〇二〇年 三月 五日 嶽麓簡會讀 303-312 發表者 宗周太郎
- 二〇二〇年 三月十二日 里耶秦簡會讀 ⑧ 1073-⑧ 1109 發表者 佐藤達郎
- 二〇二〇年 三月十九日 嶽麓簡會讀 313-324 發表者 宮宅 潔

〔壹〕の會讀も行い、これについては關係論文を
 研究班 H P (<http://www.shindai.zinbun.kyoto-u.ac.jp/index.html>) に掲載する予定に、「東方學報」をはじめとした學術誌や、中國・武漢大學の H P「簡帛網」にも投稿し、掲載された。
 龍門北朝窟の造像と造像記 班長 稻本泰生
 當班では龍門古陽洞所在の造像記約七〇〇件のうち、まず有年紀分を對應する造像とともに取り上げて確認・検討を進め、二〇一八年末で全點の検討を完了した。二〇一九年一月からは無紀年・無銘分も含めた全ての造像について、壁面のブロック単位で網羅的に再検討する作業を進め、二〇二〇年二月を以て外壁を含む全壁面の検討を完了した。當初は二〇一七〜二〇一九年度の三年計畫であったが、これまでの実績に鑑みて研究期間を二年間延長し、検討対象を古陽洞以外の北朝窟にも擴げて作業を繼續するとともに、信頼できる資料集の公刊に向けた確認・編集作業に取り組んでいる。本年度はコロナ禍で四月・五月は休會となつたが、六月末以降は基本的にオンライン、一部對面併用で研究會を再開した。造像・造像記を検討する通例の會に加え、佐藤智水氏が「古陽洞開鑿期における造營の主體について」、檜山智美氏が「クチャの佛教石窟寺院と説一切有部の分派に關する考察」、田林啓氏が「中國の神異僧像をめぐって」と題して研究發表を行った。
 二〇二〇年 六月二三日 古陽洞北壁下段の再検討 發表者 稻本泰生
 二〇二〇年 九月十五日 古陽洞開鑿期にお

る造營の主體について

發表者 佐藤智水

龍谷大學

二〇二〇年 九月二十九日 古陽洞北壁下段の再

検討 發表者 稲本泰生

二〇二〇年 十月二十七日 古陽洞南壁下段の再

検討 發表者 向井佑介

二〇二〇年十一月十日 古陽洞南壁下段の再

検討 發表者 向井佑介

二〇二〇年十一月二十四日 古陽洞南壁下段の再

検討 發表者 向井佑介

二〇二〇年十二月八日 古陽洞南壁下段の再

検討 發表者 向井佑介

二〇二〇年 一月十二日 古陽洞南壁下段・西

壁北側の再検討 古陽洞南壁下

段の再検討 發表者 向井佑介

古陽洞西壁北側の再検討

二〇二〇年 二月 九日 古陽洞外壁の再検討

發表者 稲本泰生

二〇二〇年 三月 九日 中國佛教美術研究の

最前線クチャの佛教石窟寺院と

説一切有部の分派に關する考察

——石窟の空間構成と壁畫圖像

を手掛かりに

發表者 榎山智美

京都大學

中國の神異僧像をめぐる——

南北朝時代からの系譜

發表者 田林 啓

白鶴美術館

三世紀東アジアの研究

班長 森下章司

本年度は新型コロナウイルス感染症の影響によ

り、四月から六月の研究會は休會とし、七月から

研究會を再開した。研究會は、原則として分館大

會議室での對面研究會とZoomによる中繼とを

併用したハイブリッド形式を採用し、合計八回を

實施した。班員による研究報告では、後漢から魏

晉のころに生じた墓制の變革や車騎行列の變化に

着目し、考古・圖像資料と出土文字資料・文獻史

料をもとに三世紀の中國における社會的・制度的

變化を明確にしよとした。また、近年、曹操高

陵や洛陽西朱村曹魏大墓から出土した石牌に着目

し、いくつかの石牌銘文の釋讀と考證を試みると

ともに、その研究狀況の把握と基礎的な整理をお

こなした。そのほか、高句麗をはじめとする三

四世紀東北アジア地域の狀況について、文獻史料

と考古資料の立場からそれぞれ検討會を實施し、

さらに外部から講師を招いて東アジアの動物考古

學・機械技術・葬具などをテーマに最新の研究成果

を講演してもらい、中國・朝鮮半島・日本列島

の研究狀況について知見を深めた。

二〇二〇年 七月 十日 漢魏の墓制變革・近

年における曹魏大型墓の發見と

關連するいくつかの問題

發表者 向井佑介

二〇二〇年 十月三〇日 紫綬について

發表者 森下章司

大手前大學

二〇二〇年十一月十三日 遼陽と高句麗の壁畫

墓にみえる車騎行列

發表者 岡村秀典

二〇二〇年十一月二十七日 曹魏と高句麗・高句

麗遠征と當該期の高句麗王系

發表者 井上直樹

二〇二〇年十二月十一日 日韓の動物考古學・

日韓の卜骨と犬骨の比較研究を

前提に 發表者 宮崎泰史

二〇二〇年 一月二十二日 日本列島における木

槲の受容と展開

發表者 岡林孝作

二〇二〇年 二月 五日 奈良縣立橿原考古學研究所

國の機械技術

發表者 東村純子

二〇二〇年 三月 五日 馬具からみた三・四

世紀の東北アジア・慕容鮮卑と

高句麗を中心に

發表者 諫早直人

京都府立大學

Islamizing West Asia

二〇二〇年 九月二十五日 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会へ
 ライト史會讀
 発表者 稲葉 穰
 ヘライト史會讀

二〇二〇年 十月二三日 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会へ
 ライト史會讀
 発表者 小倉智史
 東京外國語大學

二〇二〇年十一月十四日 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会へ
 ライト史會讀
 発表者 小倉智史
 二〇二〇年十一月二七日 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会へ
 ライト史會讀
 発表者 中西竜也

二〇二〇年十二月十一日 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会へ
 ライト史會讀
 発表者 中西竜也
 ヘライト史會讀
 発表者 稲葉 穰
 二〇二二年 一月二二日 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会へ

ライト史會讀

二〇二二年 二月十二日 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会へ
 ライト史會讀
 発表者 稲葉 穰

二〇二二年 二月二六日 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会へ
 ライト史會讀
 発表者 角田哲朗
 京都大學大學院文學研究科

二〇二二年 三月二六日 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会へ
 ライト史會讀
 発表者 杉山雅樹
 京都外國語大學

20世紀中國史の資料的復元
 隔週金曜午後に研究班例會を開催することを中心に活動を進めた。班員は三十数名、毎回の研究班例會の出席者は二十名程度であった。新型コロナウイルスの感染擴大のため、オンラインあるいはハイブリッド方式による開催となったが、幸い平常時と同様の規模・質を維持することができた。特にオンライン開催であることをいかして、東京で活躍する複数の研究者による積極的な参加を得られたのは収穫であった。十二月末時点で開催した例會は十二回を数え、毎回事前にレジュメを班員に配布し、またコメントーターをつけて、専門的見地から議論を深められるよう工夫した。研究

班では、まず報告者が一時間半程度の報告を行ったあと、コメントーターが三十分程度の批評を加え、その上で全體討論を実施するという形式を取った。報告用レジュメを事前に班員に配布していることもあり、議論が活発に行われた。また、複数の外國人研究者・院生（主として中華人民共和國出身）が継続的に参加していることも本研究班の特色であり、彼らとの討論を通じて、中國の近現代史関連の基本的な文献や資料集の成り立ちについての理解をいっそう深めることができた。

資料的復元として、注目すべき研究・対象としては、内山完造『花甲録』や、農村部における工作の状況を伝える『喬欽起工作筆記』などが俎上にあげられ、それらを資料として扱う場合の問題点や注目点が提示された。また、中國共產黨史にかかわる「若干の歴史問題に関する決議」や「國家構成員」概念など、従来の研究蓄積の前提を問い直す試みも行われた。さらに、前身の研究班の成果である『毛澤東に関する人文學的研究』について二度の合評會を開催、八名の評者によるコメントを得て、中國現代史研究の蓄積の繼承・深化の道筋を探った。

二〇二〇年 五月 八日 毛澤東時代の讀書規範——傳統からの離脱と回歸
 発表者 比護 遙
 教育學研究科
 コメントーター 水羽信男
 廣島大學
 二〇二〇年 五月二二日 二十世紀中國の政

治・思想史研究を發展させるための出版政策史研究——『中華人民共和國出版史料』の活用

発表者 中村元哉

東京大學

コメンテーター 瀬戸 宏

播南大學

二〇二〇年

六月 五日 『毛澤東に關する人文學的研究』合評會(1) 毛澤東と胡適

發表者 森川裕貫

關西學院大學

毛澤東と巨大水利建築——一九五〇年代の官廳ダムと十三陵ダムを中心に

發表者 島田美和

慶應義塾大學

二〇二〇年

六月十九日 『毛澤東に關する人文學的研究』合評會(2) 政治家・藝術家・一九四〇年代の延安における全體主義藝術の確立

發表者 漆 麟

人文科學研究所

文化大革命と毛澤東の水泳

發表者 高嶋 航

文學研究科

二〇二〇年

七月 三日 史料としての『花甲録』——特に戦時期の檢證

發表者 金丸裕一

立命館大學

二〇二〇年

コメンテーター 谷 雪妃

二〇二〇年 七月十七日 『劉少奇派』とは何であつたのか

發表者 谷川眞一

神戸大學

コメンテーター 林 禮釗

大阪大學

二〇二〇年

十月 二日 『喬欽起工作筆記』から見る現代中國政治の轉換

發表者 田中 仁

大阪大學

二〇二〇年

十月十六日 『臺灣之農具』と帝國の視角

發表者 都留俊太郎

東京大學

二〇二〇年

十月三〇日 中國共產黨が使用する國家構成員の概念についての歴史的檢討

發表者 和田英男

大阪大學

二〇二〇年

十一月十三日 上海市檔案館所藏史料から考えるある「民族資產階級」の軌跡(一九四九—一九六五)

發表者 水羽信男

廣島大學

二〇二〇年

十一月二日 日獨合作映畫『新しき土』の中國上映騒動について…民國外交部檔案を手がかりに

發表者 楊 韜

廣島大學

二〇二〇年

十一月二七日 橘樸の人物像の再構成・大正知識人、民族誌家、社會民主主義者

發表者 谷 雪妃

文學研究科

二〇二〇年十一月十一日 若干の歴史問題に關する決議に關する若干の考察

發表者 石川禎浩

小野寺史郎

二〇二〇年

一月十五日 中華人民共和國成立初期の復員軍人と榮譽軍人模範——「榮軍旗幟」張樹義の物語と基層革命關係者集團

發表者 丸田孝志

廣島大學

二〇二〇年

一月二十九日 林彪派將軍回想録の資料價值・邱會作回憶録を中心に

發表者 瀬戸 宏

播南大學

二〇二〇年

二月十二日 日獨合作映畫『新しき土』の中國上映騒動について…民國外交部檔案を手がかりに

發表者 楊 韜

廣島大學

二〇二〇年

二月二日 『喬欽起工作筆記』から見る現代中國政治の轉換

發表者 田中 仁

大阪大學

二〇二〇年

十月十六日 『臺灣之農具』と帝國の視角

發表者 都留俊太郎

東京大學

二〇二〇年

十月三〇日 中國共產黨が使用する國家構成員の概念についての歴史的檢討

發表者 和田英男

大阪大學

二〇二〇年

十一月十三日 上海市檔案館所藏史料から考えるある「民族資產階級」の軌跡(一九四九—一九六五)

發表者 水羽信男

廣島大學

二〇二〇年

七月 三日 史料としての『花甲録』——特に戦時期の檢證

發表者 金丸裕一

立命館大學

- 佛敎大學
 コメンテーター 韓 燕麗 東京大學
 二〇二一年 二月二六日 中華人民共和國初期における肺結核醫學資料の編纂と出版(一九四九〜一九五七)
 發表者 瞿艷丹
 人文科學研究所
 コメンテーター 飯島 涉 青山學院大學
 二〇二一年 三月十二日 ふたたび、「路線」について 發表者 江田憲治
 コメンテーター 李ハンキョル 文學研究科
- 古典中國語のコーパスの研究 班長 安岡孝一
 『禮記』の Universal Dependencies コーパスを完成し、ついで『十八史略』の Universal Dependencies コーパスに着手した。これらのコーパスと、過去に製作した『孟子』『論語』コーパスを合わせ、カレル大學との國際協力により、Universal Dependencies 26 (二〇二〇年五月十五日リリース) および Universal Dependencies 27 (二〇二〇年十一月十五日リリース) として、WWWで公開した。
- これらの古典中國語コーパスをもとに、古典中國語形態素解析エンジン「MacCab-Kanban」および古典中國語係り受け解析エンジン「UD-Kanban」の解析精度を上げ、PyPI から python3 モジュールとして公開した。また、スタ
- ンフォード大學との國際協力により、多言語係り受け解析エンジン「Stanza」に、古典中國語モジュールを実装した。さらに、カレル大學との國際協力により、多言語係り受け解析 API 「UDPipe 2」にも、古典中國語モジュールを実装中である。
- 二〇二〇年 四月 十日 MeCab-Kanban と UD-Kanban
 二〇二〇年 四月 二四日 研究班活動方針
 二〇二〇年 五月 八日 UD-Chinese の試作
 二〇二〇年 五月 二二日 Universal Dependencies 26 リリース
 二〇二〇年 六月 五日 『禮記』 Universal Dependencies 化(完)
 二〇二〇年 六月 一九日 Universal Dependencies Workshop
 二〇二〇年 七月 三日 『An Advanced Introduction to Semantics: A Meaning-Text Approach』
 二〇二〇年 七月 十七日 Enhanced Universal Dependencies
 二〇二〇年 九月 十八日 『形態素解析部の付け替えによる近代日本語(舊字 舊假名)の係り受け解析』
 二〇二〇年 十月 二日 CoNLL-U SVG Editor Role
 二〇二〇年 十月 十六日 變體漢文の XPOS を Unicode 品詞にする
 二〇二〇年十一月 六日 『Is POS Tagging Necessary or Even Helpful for Neural Dependency Parsing?』
 二〇二〇年十一月 二〇日 Universal Dependencies 27 リリース
 二〇二〇年十二月 四日 『Universal Dependencies v2: An Evergrowing Multilingual Treebank Collection』
 二〇二〇年十二月 十八日 じんもんこん(一) 2020 報告
 二〇二一年 一月 十五日 COMBO-pytorch と UnDic-COMBO
 二〇二一年 三月 五日 東洋學へのコンピュータ利用
- 北朝石窟寺院の研究 II 班長 岡村秀典
 前の研究班に引きつぎ中國山西省大同市に所在する雲岡石窟の原報告(水野清一・長廣敏雄『雲岡石窟』全十六卷三二冊、一九五二〜一九五六年)の圖版解説を會讀しながら、關連寫眞の整理を進めた。今年度は京都大學人文科學研究所・中國社會科學院考古研究所編『雲岡石窟』第二〇卷(科學出版社東京、二〇一七年)の研究成果をもとに、原報告の第十五卷西方諸洞について検討した。共同研究に關連した公表實績としては、岡村秀典著・徐小淑譯『雲岡石窟の考古學研究』(四川人民出版社、二〇二一年、原著『雲岡石窟の考古學 遊牧國家の巨石佛をさぐる』京大人文研東方學叢書 3、臨川書店、二〇一七年) および石松日奈子著・王雲譯『雲岡石窟の皇帝大佛――

從鮮卑王到中國皇帝」(『故宮博物院院刊』二〇二一年第一期、原著「雲岡石窟の皇帝大佛——鮮卑王から中華皇帝」、『國華』一四五一號、二〇一六年)がある。

新型コロナウイルス感染症の拡大により、研究會はZOOMにより共同研究室でのオンラインとオンラインのハイブリッド形式で実施した。オンラインでは参加のむずかしい中國や東京など遠隔地の研究者がオンラインで参加できたのは意義深いことであった。

二〇二〇年 十月 六日 雲岡石窟西端諸洞

發表者 岡村秀典

二〇二〇年 十月二〇日 雲岡石窟西端諸洞

發表者 岡村秀典

二〇二〇年十一月十七日 雲岡石窟西端諸洞

發表者 岡村秀典

二〇二〇年十二月 一日 雲岡石窟西端諸洞

發表者 岡村秀典

二〇二〇年 一月十九日 雲岡石窟西端諸洞

發表者 岡村秀典

中國在家の佛教觀・唐道宣撰『廣弘明集』を讀む

班長 船山 徹

報 彙

昨年は、六朝隋唐時代の知識人や庶民の佛教を知るため、唐の道宣撰『廣弘明集』卷二十六に収める以下の文献を會讀し、(1)漢語原典の校訂本・(2)現代日本語譯・(3)重要原語の語注を作成した——南齊の周顒「與何胤書」、梁の武帝「斷殺絕宗廟犧牲詔」、顏之推「誠殺家訓」、梁武帝「斷酒肉文」。このうち南齊の周顒の書は、佛

教では生き物を殺さないことを実践するので肉食してはいけないことを説く。梁の武帝の「斷殺絕宗廟犧牲詔」と同じく武帝の「斷酒肉文」は、飲酒と肉食が過ちであることを、在家者である皇帝が出家者に説く内容である。その内容から、當時の出家者は男女を問わず肉食していたという實態を描き、武帝はあるべき佛教を實現すべく、肉食と飲酒の過から逃れる打開策を主張する。顏之推の文も基本的に同じ趣旨である。いずれも五〜六世紀の在家佛教徒であるが、彼らにとつて菜食主義は宗教觀と生命觀に根ざすものであることが様々な角度から説明されており、在家佛教觀の大きな一面を浮き彫りにする資料として意義がある。今年度は梁の武帝「斷酒肉文」の残りの部分を讀了する。この文献は、内容も意義深い語彙の點からも6世紀前半の生きた語彙が見られ、佛教に關する制度史の資料ともなる。今年度の研究班回数は十四回。

二〇二〇年 五月二九日 會讀周顒「與何胤書」

發表者 船山 徹

二〇二〇年 六月十九日 會讀梁武帝「斷殺絕宗廟犧牲詔」

發表者 河上麻由子

二〇二〇年 七月 三日 會讀顏之推「誠殺家訓」

發表者 中村愼之介

二〇二〇年 九月十八日 會讀梁武帝「斷酒肉文」(1)

發表者 古勝隆一

二〇二〇年 十月 二日 會讀梁武帝「斷酒肉文」(2)

發表者 魏 藝

二〇二〇年 十月十六日 會讀梁武帝「斷酒肉文」(3)

發表者 趙ウニル

二〇二〇年 十月三〇日 會讀梁武帝「斷酒肉文」(4)

發表者 中西俊英

二〇二〇年十一月二〇日 會讀梁武帝「斷酒肉文」(5)

發表者 船山 徹

二〇二〇年十二月 四日 會讀梁武帝「斷酒肉文」(6)

發表者 久永昂央

二〇二一年 一月十五日 會讀梁武帝「斷酒肉文」(7)

發表者 倉本尙徳

二〇二〇年 一月二九日 會讀梁武帝「斷酒肉文」(8)

發表者 船山 徹

二〇二〇年 二月十九日 會讀梁武帝「斷酒肉文」(9)

發表者 ウィッテルンCP

二〇二〇年 三月 五日 會讀梁武帝「斷酒肉文」(10)

發表者 河上麻由子

人文學研究部

近代京都と文化

班長 高木博志

本研究班は、對面による研究會實施を原則としているため、本年前半は、新型コロナウイルスの感染擴大及び緊急事態宣言の發令により、當初豫定していた研究會が實施できなかった。本年最初の研究會は、九月十二日に開催した宇治川巡見である。感染對策を十分に講じた上で、宇治川周邊の茶園や天ヶ瀬ダムを見學し電力開發や生業の歴史を資史料から検討した。十月三十一日には、京都文化博物館の「舞子モダン」展との共催企畫とし

て、同博物館學藝員・植田彩芳子氏による展示解説と研究報告を行い、班員全體で深い議論を行った。十一月七日には、「大正期京都のロマン主義」に關するシンポジウムを開催した。本來は一般公開する豫定であったが、感染症対策のため、班員内部にのみ公開するクローズドな會となったが、地理學・歴史學・美術史・文學・映畫研究と學際的に大正期の文化とロマン主義概念を鍛え直す内容となった。研究會參加者は兩日ともに二十人前後に及び、活發な議論が繰り廣げられた。二〇二一年三月二十七日には、久保田米徳・吉川觀方という單に美術の領域にとどまらず、ジャーナリズム・映畫など廣く文化や社會にはみ出す、本研究班の趣旨に沿う報告を得た。

環境問題の社會史的研究

班長 岩城卓二

本年前半は、新型コロナウイルスの感染擴大及び緊急事態宣言の發令により對面型の研究會が開催できなくなつたため、當初豫定よりも開始が遅れたが、六月よりZoomによる研究會を開始した。本年は、日本近世・近代史を専門としつつも古氣候學や民俗學・地質學など學際的な視野から研究を進めてきた氣鋭の研究者による報告を軸に、日本史のみならず中國史・西洋史、更には文化人類學・哲學など多様な參加者による活發な議論が展開された。本年はこれに加えて、人文研究班では初の試みである、Zoomによる研究會の録畫も行った。

人の分類と人種化に關する國際比較研究

班長 竹澤泰子

二〇二〇年五月に警察官によつて殺害されたジョージ・フロイドさんの死を契機に世界中で高まったブラック・ライブズ・マター（黒人の命を粗末にするな）運動を受け、二〇二〇年六月に「緊急リレートーク・ブラック・ライブズ・マター運動の背景と課題」を主催し、國內外から五〇〇人近い參加者が集い、議論や意見交換を行った。さらに新型コロナウイルスの感染蔓延によつて、日本社會においても、「目に見えない」差別が社會問題となつてきている。この問題を深く掘り下げて議論するために、「コロナ時代の人間のちがいと差別」と「ちがひ」と差別／人類學からの提言」という二つのシンポジウムを主催した。さらに國際発信という點では、『環太平洋地域の移動と人種』（京大出版二〇二〇年）の合評會を二回開催し、英語版出版に向けて準備している。またフランスEHESSの研究者たちとの共同研究の成果は、『ALTERITE, RACE ET UNIVERS. SALISME: UNE HISTOIRE JAPONAISE.』（Politica特集號二〇二一年一月〜三月）として刊行される。

21世紀の人文學

班長 岡田曉生、小關 隆、佐藤淳二

本年度はコロナ禍のため對面研究會は中止せざるを得なかつたが、六回の研究會をもち、そのほかに「生きるための人文學」と題した三回シリーズの動畫を制作してYouTubeにアップした。後

者はコロナ禍の人文學の發信の可能性を問うものとして、疫病と世界史（藤原辰史）、コロナ禍のEU（遠藤乾）、未來の音樂の可能性（三輪眞弘）を論じた。また研究會においてはズームはもちろん、テキスト同覽式の形式（あらかじめ發表者が原稿を參加者に同覽し、それに基づいて參加者がMLで應答する）が極めて充實した議論を可能にする形式であることを確認した。また現場のアーティストへの多様な分野の研究者からの聞き取りも實り多いものであった。共同研究においては、今後の人文學が「近代」のみならず、人間世界自體の終焉の可能性を見据えたものにならざるをえないという點に、議論が收斂しつつある。なお制作した動畫は十一月末にアップしたが、十二月末日において合計約七〇〇回のアクセスがあった。帝國日本の「財界」形成についての研究・一八九五年〜一九四五年 班長 籠谷直人

本年度は、コロナウイルス蔓延の影響下で研究會を開催することができなかった。

研究課題藝術と社會

班長 高階繪里加

三年計畫の第一年度である本年は、當初四月の開始を豫定していたがコロナ禍のため開始が延期され、九月よりオンラインによる開催を実施することとなった。今年度はすべての研究會をオンラインによる開催した。第一回研究會は九月二十六日（土）に開催、岡田曉生氏「パウエル・ベッカーと音樂社會學のはじまり」および藤井俊之氏「藝術と社會、自律と媒介——アドルノの音樂論に注目して」の2名の發表者による音樂と社會に關連す

る発表が行われた。第二回研究會は十月十七日(土)に開催、近代日本における繪葉書をテーマとして、大原由佳子氏「繪葉書アルバム」から見る第一回渡歐時の黒田重太郎」および小嶋ひろみ氏「竹久夢二とエハガキ——月刊夢二カードと月刊夢二エハガキ——」の二名による発表が行われた。第三回研究會は十一月二日(土)に開催、京都文化博物館で開催中の「舞妓モダン展」に關連し、植田彩芳子氏による発表「日本近代における描かれた舞妓について」が行われた。第四回研究會は宮下規久朗氏により、ヨーロッパと日本の歴史的疫病流行と美術の關連についての発表「疫病と美術」が行われた。第五回研究會は二〇二一年三月六日(土)に、三宅拓也氏による発表「藝術と社會の接點としての商品陳列所」が行われた。いずれの研究會においても、発表後に藝術と社會に關わる活發な議論が交わされた。

個人研究

東方學研究部

- 先秦時代の金文 淺原達郎
 川西走廊の漢藏諸語の記述研究 池田 巧
 中國共產黨史の研究 石川禎浩
 イスラーム東漸史の研究 稲葉 穰
 東アジア佛教美術史の研究 稲本泰生
 近代中國の財政と社會 岩井茂樹
 佛教研究知識ベース——禪佛教を例として
 WITTEN, Christian

古代中國の考古學研究 岡村秀典
 インド・中國における佛教の學術と實踐 船山 徹

秦漢制度史の研究 宮宅 潔
 高麗官僚制度研究 矢木 毅
 文字コード理論 安岡孝一
 六朝隋唐佛教史の研究 倉本尚徳
 中國注釋學史研究 古勝隆一
 中國イスラームの研究 中西竜也

中國中世近世の文學理論 永田知之
 東アジア傳統科學の研究 平岡隆二
 十〜十三世紀ユーラシア東方における王朝關聯係の研究 古松崇志
 歴史考古學的方法にもとづく中國文化研究 向井佑介

近代華南沿海の社會經濟制度の變容 村上 衛
 東方學における對象の論理學的研究 白須裕之
 中國家具とその使用に關する研究 高井たかね
 20世紀臺灣農業經濟の變容と自治・自律 都留俊太郎

南宋期道學の經書解釋 福谷 彬
 中國古代中世の官制史 藤井律之
 東西資料によるモンゴル時代の文化交流と諸制度の研究 宮 紀子
 文字定義情報に基づく文書表現系に關する研究 守岡知彦

人文學研究部 岩城卓二
 近世社會解體過程の研究

近代西洋音樂史 岡田曉生
 戰前期日本の工業化と華僑ネットワーク 籠谷直人

イギリス・アイルランド近現代史 小關 隆
 技術・自然・(ポスト)現代性の思想——哲學的探求 佐藤淳二
 近代天皇制の文化史的研究 高木博志
 近代日本美術と西洋 高階繪里加
 人種・エスニシティ論 竹澤泰子

精神分析的知の思想史的位づけ 立木康介
 西アフリカと南アジアの宗教、憑依、間身體性 石井美保
 近代トランスコーカサス(特にグルジア)における匪賊 伊藤順二
 近現代日本の社會史、思想史、技術史 KNAUDT, Tim

東アジアにおける生命科學と「自然」 瀬戸口明久
 〈非人間〉の歴史と記憶の存在論 直野章子
 近現代日本の社會運動・社會思想 福家崇洋
 農業史の再構築 藤原辰史
 フランス象徴主義と文學的モデルニテ 森本淳生

皇室の土地所有に關する歴史的研究池田さなえ
 近代日本民俗誌システムの研究 菊地 暁
 啓蒙と文學——アドルノ美學における「人間性」の位づけ—— 藤井俊之

事業概況

・ Kyoto Lectures 2020

二〇二〇年四月二二日 (オンライン上で開催)

Gesaku Literati and Early Meiji Print Culture: Remaking Popular Culture for the Masses

講師 Alistair Swale (カンタベリー大学)

・ Kyoto Lectures 2020 on Zoom

二〇二〇年五月二七日 (Zoomで開催)

Japan's Ocean Borderlands: Nature and Sovereignty

講師 Paul Kreitman (ロンドン大学)

・ 人文研アカデミー：緊急リレートーク：ブック・ライブズ・マター運動の背景と課題

二〇二〇年六月二一日 (Zoomで開催)

NHK『これでわかった！世界のいま』要望書騒動——日本での課題—— 貴堂嘉之 (一橋大学)

暴力と搾取の歴史——人種ステレオタイプの視點から 坂下史子 (立命館大学)

リベラルたちの刑罰國家とBLMの挑戦

藤永康政 (日本女子大学)

他人事ではない！日本における黒人差別のリアリティ

ティ ジョン・G・ラッセル (岐阜大学)

コメンテーター 有光道生 (慶應義塾大学)、キンバリー・サンダース (ハーヴァード大学大学院)

博士課程・早稲田大学訪問研究員)

司會 竹澤泰子

・ Kyoto Lectures 2020 on Zoom

二〇二〇年六月二六日 (Zoomで開催)

Early Meiji "Accounts of Prosperity": The Making of an Urban Literary Canon

講師 Gala Maria Follaco (ナポリ東洋大学)

・ Kyoto Lectures 2020 on Zoom

二〇二〇年七月二九日 (Zoomで開催)

Animal Shape-Shifters from Japanese Folktales to North-American Fiction

講師 Luciana Cardi (大阪大学)

・ 人文研アカデミー二〇二〇「環太平洋地域の移動と人種統治から管理へ、遭遇から連帯へ」合評會

二〇二〇年八月二四日 (Zoomで開催)

評者 飯島眞里子 (上智大学)、貴堂嘉之 (一橋大学)、津田浩司 (東京大学)

・ 国際研究ミーティング「北白川EFFEOサロン：日本における信仰と「知」のはざま——中世・近世・近代を中心に」

二〇二〇年九月二五日

於 フランス国立極東學院京都支部

主宰責任者 マルタン・ノゲラ・ラモス (フランス国立極東學院、)

京都大学人文科学研究所客員准教授、鈴木堅弘 (京都精華大学)、平岡隆一

日本の歴史における「信仰」と「知」の交點に着目し、雙方が未分化の時代における「民間習俗の實態」や「民衆の思想観」がどのようなものであったのかという問題を取り上げた。本題にお

る「知」とは、近代學問が成立する以前の醫術、

占星術、本草學、陰陽道、呪術、修驗道、和算、

茶道、佛教教理、職工技術、もの語り、詩文、畫

道など多岐にわたるものである。科學や醫學、文

學などの近代學問が成立する以前に、これらの

「知」の祖型は、いかにして人びとの生活に根ざ

し、世俗民の生々しい信仰と結びつくなかで、獨

自の發展をとげてきたのか、その理由や経緯を、

十四世紀から十九世紀の日本における民衆社會の

歴史を通じて検討してきた。四回の講演會を開催

し、講師の報告をもとに参加者が議論を行うかた

ちで、當該問題の理解を深めた。

①室町時代の密教と現世利益——茶枳尼天曼荼羅

をめぐって 講演者 ガエタン・ラポー (京都大学

人文科学研究所白眉特定准教授、EFFEO共同研究員)

②二〇二〇年十月十六日 於 フランス国立極東學院京都支部

阿彌陀の祕密空間——隠さざるをえなかった儀禮

空間の機能と教義的背景 (近世を中心に) 講演者 マルクス・リュウシユ (龍谷大学

世界佛教文化研究センター博士研究員)

③二〇二〇年十月三〇日 於 フランス国立極東學院京都支部

湯殿山信仰に登場する身體とモノ 講演者 アンドレア・カステイリヨニ

(名古屋市立大学講師)

④二〇二〇年十一月二七日

於 フランス国立極東學院京都支部
京坂キリシタン事件の主要人物——入信の動機と
宗教活動を中心に

講演者 宮崎ふみ子(惠泉女學園大學名誉教授)
・ 國際研究ミーティング「環境史研究の可能性」

主宰責任者 藤原辰史, Harald Fuess
(ハイデルベルク大學教授)

明治期日本のコレラエピソードを、外交、科
學、アジア史の文脈から考える。特に、十六萬人
の日本人が感染したと言われるヒスペリア號事件
について、さまざまな資料を利用しながら、それ
をめぐる日本とドイツの関係、東アジアの情勢、
公衆衛生の状況などについて説明した。今日のパ
ンデミックを歴史的にどう位置付けるかに關する
重要な論點もあり、講演後、感染症に關心をもつ
参加者で、他國・他の感染症との比較や、パンデ
ミック研究の展望について議論した。

二〇二〇年十月二三日

於 京都大學人文科學研究所本館

講演者 Harald Fuess

・ 國際研究ミーティング「ポスト・ヒューマン」
の人文學」

主宰責任者 ジル・フィリップ

(Gilles Philippe ローザンヌ大學)、森本淳生

報 彙
深化するグローバルイズム、遺傳子工學やAIな
ど飛躍的發展を遂げたテクノロジー、深刻な環境
破壊と氣候變動、コロナウイルスが示したパンデ
ミックの危機等々が示す現代のポスト・ヒューマ
ンの状況、すなわち、近代的な「人間」の「終焉

以後」の時代において人文學はいかなるものであ
りうるのかを考察した。森本はマラルメやウエル
ベックなど十九世紀以來のフランス文學に見られ
る、人間の非人間的な次元に對する關心を浮き
彫りとし、フィリップは文體論的な觀點よりコン
ピュータによつて生成された文學作品やフロー
ベールが夢想した「語り手のいない作品」を論じ、
塚本はオルテガ・イ・ガセット、ヴァレリー、メ
ルロ・ポンティを取りあげて人間と世界との相互
連關的な生成の次元を明らかにし、篠原は氣候變
動や震災以後の人為的世界の脆さと、それを踏ま
えてこそ感じられる新たなリアルの感覺を川内倫
子の寫真を例に論じた。

二〇二〇年十一月十四日

ウエビナー(講演者・通譯者は京都・東京・パリ
より参加) 森本淳生 Atsuo MORIMOTO (京都
大學)

イントロダクシオン——〈ノン・ヒューマン〉から
〈ポスト・ヒューマン〉へ

Introduction: Du «Non-humain» au «Post-hu-
main»

ジル・フィリップ Gilles Philippe (ローザンヌ大
學) ポスト・ヒューマンイズムと文體論

Posthumanisme et stylistique

塚本昌則(東京大學)

非人間の詩學——オルテガ・イ・ガセット「藝術
の非人間化」からメルロ・ポンティ「制度化」ま
で

Poétique de l'inhumain: De «La Déshumanisation

de l'art» d'Ortega y Gasset à «L'Institution» de
Merleau-Ponty 篠原雅武(京都大學)

世界の脆々の只中での post-humanities: 川内倫
子の寫真實踐とティモシー・モートンのヒロロ
ジー思考をめぐって

Le post humanisme au coeur de la fragilité du
monde: la pratique photographique de Kawachi

Rinko et les idées de Timothy Morton sur
l'écologie

・ 國際研究ミーティング「Dynamism of Social
Context Deciphered by a Linguistic Analysis of
Ancient Literature: The 1st workshop of the

SPRITS project "Chronological and Geogra-

phical Features of Ancient Indian Literature

Explored by Data-Driven Science"]

主宰責任者 天野恭子(京都大學白眉センター・
人文科學研究所特定准教授)

およそ文獻を正しく讀む上で、文獻成立の背景

となる社會への理解は根底となる要件である。し
かし古代社會の場合は多くの場合において實態が
謎に包まれ、そこでどのような過程によつて文獻
が成立したかも明らかでない。古代インドの宗教

文獻ヴェーダはそのような例の一つである。この
ようなヴェーダ文獻の言語を分析することで、古
代インド社會の動き、地理的な移動や勢力圏の變
化を讀み解くという課題に、データサイエンスお
よび可視化技術を援用することによって取り組む
のが、京都大學内ファンドSPRITS採擇の學
際型プロジェクト「データ駆動型科學が解き明か

す古代インド文献の時間的特徴」であり、本ミーティングはその第一回ワークショップである。本ワークショップでは、プロジェクトメンバーによるそれぞれの担当部分の研究の現状を紹介するとともに、今後取り入れる可能性のある新しい技術を検討した。本ワークショップの重要な目的の一つは、研究テーマおよび方法論に同じ関心を持つ研究者について新しい研究者コミュニティを創設することであったが、世界中から百名を超える参加者を得て議論も活発に行われ、大きな成果を得た。

二〇二二年二月十二日

Problems in the Formation of the Vedas, Ancient Indian Religious Texts 天野恭子

The Possibility of Information Visualization and Data Analysis for Ancient Indian Literature

夏川浩明 (京都大学学術情報メディアセンター) Relationship Among Vedic Schools Deciphered by the Visualization of Mantra Collocation 天野恭子

Citation Prediction Using Academic Paper Data and Application for Surveys 濱地暉 (京都大学工学研究科)

Measuring the Semantic Similarity between the Chapters of Taittiriya Samhita Using a Vector Space Model 京極祐樹 (Leipzig University)

Dating Vedic Texts with Computational Models: Algorithmic Considerations and Data Selection Oliver Hellwig (University of Zurich, Depart-

ment of Comparative Language Science) monogram: Background, History, and Purpose of a Tool for East Asian Text Analysis

師茂樹 (花園大学文学部)

・オンライン・シンポジウム「中国学研究と翻譯」およびランチャイムトーク「グローバル化と翻譯の意義」

主宰責任者 小野寺史郎 (埼玉大学准教授)・

森川裕貫 (関西学院大学准教授) 所内申請者 石川禎浩

オンライン開催の利点を生かして、シンポジウム「中国学研究と翻譯」およびランチャイムトーク「グローバル化と翻譯の意義」のいずれについても、中国・アメリカから多数の研究者の参加を得ることができ、大變な盛會となった。時差や接続等の問題が當初懸念されたが、当日はプログラム通りに開催することができた。グローバル化に対応した學術・研究が求められる一方で、従来の國際交流を支えてきた翻譯の意義についてはこれまで十分に検討されてこなかった。日本の中國研究の英語圏への紹介において多大な貢献をしたフォークゲル氏、英書の日本語譯で多数の成果をものさしている伊藤氏、日本の研究成果の中國への紹介を積極的にされている楊氏の報告は、この點を考えるものとして意義深いものであった。報告後には、オーディエンスも交えて活發な對話がなされ、研究成果の國際発信のありかたについて意見が共有された。

①二〇二〇年十月三十一日

京都大学人文科学研究所本館四階大會議室を中継會場とし、ZOOMを用いてオンライン開催「日本語は難しいでしょう」と言われて、「どのような譯書を讀者に届けるか」、「四面雲山皆入眼、萬家煙火總關心」

講演者 ジョシユア・フォーゲル

(カナダヨーク大学教授)

眞 (東洋大学非常勤講師)

楊 韜 (佛教大学准教授)

②二〇二〇年十月三十一日

「翻譯からグローバル化を考える」、「英書翻譯の新たな可能性」、「グローバル時代における日中翻譯」 講演者 ジョシユア・フォーゲル、

伊藤 眞、楊 韜

・國際ワークショップ「中國三教と日本神道の「見える」ものや「見えない」もの」

主宰責任者 外村 中 (ヴェルツブルク大学上級講師)

本ワークショップは、人文科学研究所の共同研究一般A班・「見えるもの」や「見えないもの」に關わる東アジアの文物や藝術についての學際的な研究」(班長・外村 中、副班長・稻本泰生)の關連企畫であり、當該班の過去二年の研究成果を總括するとともに、これからの展開の可能性をさぐり、廣く國內外に発信する場と位置づけている。具體的には、これまで個別に檢證してきた佛・道・儒に日本神道を加えた四教の「交渉の様相」に焦點をあて、彫像や畫像などの文物と對照させつつ考察を加える機會とする。ワークショップ

プは人文研を據點にオンラインミーティングで實施し、四人の研究者が四教それぞれに軸足をおいた研究発表を行って問題提起し、これに基づいて多分野の研究者が参加して討論を行う。その最大の目標は、当該テーマに關わる諸問題について、ジャンルの垣根をこえた国際レベルの共通認識を形成することに存する。

二〇二一年三月二八日

京都大學人文科學研究所分館考古藝術共同研究室及びオンラインミーティング

①道家系と儒家系と伊勢神道の「一なる」もの、「一なる」ものは「道」か「氣」か

報告者 外村 中

②佛像と道教像の圖像的關係性再考——南北朝唐時代

報告者 齋藤龍一（大阪市立美術館學藝員）

③道學諸派における『太極圖說』解釋

報告者 福谷 彬

④北宋眞宗期の佛教美術と三教理解——舍利莊嚴を中心に

報告者 稲本泰生

・國際研究ミーティング「現代の論點：生きるための人文學」第一シリーズ（全三回）

主宰責任者 松井 茂

（情報科學藝術大學院大學准教授）

全三回とも、新型コロナウイルスの感染擴大という大状況の中で人文學的思考がいかなるレゾンデートルを主張できるか、を課題意識として共有している。第一回は現下のコロナ禍を歴史的なパースペクティブの中でどう捉えるか、を、第二

回はEU諸國およびEUを離脱したイギリスでコロナ禍へのいかなる對應が進められているか、を、第三回は人が集まること自體が難しいコロナ時代における藝術とりわけ音楽の在り方をどう構想するか、を主題とした。収録した講演および討論の映像をそのまま放映するのではなく、YouTubeでの公開に先立って、映像メディアの専門家によって編集し、さらに音楽を添えるなど、「作品」と呼びうる水準に仕上げることに意を盡くした。今後も同様の企畫が續き、「生きるための人文學」を掲げる人文研の存在を廣く社會に知らしめることに期待したい。

二〇二〇年十一月二六日、YouTubeで公開

①歴史學から考える新型コロナウイルス

藤原辰史、直野章子

②コロナ危機下の歐洲

遠藤乾（北海道大學教授）、小關隆

③コロナ時代の未來の音楽 岡田暁生、三輪眞弘

（情報科學藝術大學院大學學長）

・Kyoto Lectures 2020 on Zoom

二〇二〇年九月二八日（Zoomで開催）

Articulating Inner Dharma: The Development of the "Five Viscera Mandala" in Japanese Esoteric Buddhism

講師 Takahito Kaneyama

（京都大學／龍谷大學）

・人文研アカデミー2020 連續セミナー『秦帝國の實像——同時代資料が語る始皇帝の時代』

二〇二〇年十月一日、十月八日、十月十五日、十月二二日（Zoomで開催）

十月一日（木） 秦の「法治」とその實情 宮宅潔
十月八日（木） 秦帝國の情報技術 畑野吉則
（奈良文化財研究所 アソシエイトフェロー）
十月十五日（木） 皇帝と祭祀 目黒杏子
（人文科學研究所非常勤研究員）

十月二二日（木） 秦帝國を支えた馬 菊地大樹
（總合研究大學院大學特別研究員）

・オンライン公開シンポジウム「ポスト・ヒューマニズ」の人文學 Les Humanités & post-humanities
二〇二〇年十一月十四日（Zoomで開催）

イントロダクション——（ノン・ヒューマン）から（ポスト・ヒューマン）へ 森本淳生
ポスト・ヒューマニズムと文體論

ジル・フィリップ（ローザンヌ大學）
非人間の詩學——オルテガ・イ・ガセット「藝術の非人間化」からメルロ・ポンティ「制度化」まで 塚本昌則（東京大學）

世界の脆さの只中での post-humanities：川内倫子の寫實實踐とティモシー・モートンのエコロジイ思考をめぐって 篠原雅武（京都大學）

・北白川EFFEOサロン2019-2020 日本における信仰と「知」のはざま〜中世・近世・近代を中心に〜

二〇二〇年十一月二七日

於 フランス國立極東學院京都支部

（同時にZoomで配信）

京坂キリシタン事件の主要人物——入信の動機と

宗教活動を中心に

講師 宮崎ふみ子 (惠泉女學園大學名譽教授)
・ 人文研アカデミーシンポジウム「抑壓されたものの痕跡を求めて／辿って——記憶の存在論と歴史の地平Ⅱ」

二〇二〇年十二月五日 (Zoomで開催)
「ありえない」出来事の方方——原爆の記憶と性暴力の記憶 直野章子
地を這うものたちの歴史——断絶の記憶から 柿木伸之 (廣島市立大學)

討論者 富山一郎 (同志社大學)、立木康介
・ オンライン公開シンポジウム『日本の傳統文化』を問い直す』

二〇二一年一月十四日 (Zoomで開催)
漢字圍古醫籍の定量・比較研究——その異・同と社會經濟背景 眞柳誠 (茨城大學名譽教授)
日本繪畫の向こう側——中國繪畫史からの視點 宮崎法子 (實踐女子大學文學部教授)

異文化として日本を眺める——ヨーロッパ近世の眼差しとキリシタン時代の布教活動 シルヴィオ ヴィータ
(京都外國語大學外國語學部教授)

座談會眞柳誠、宮崎法子、シルヴィオ ヴィータ
司會：重田みち (共同研究)
『日本の傳統文化』を問い直す』(班長)

・ Kyoto Lectures 2021 on Zoom
二〇二一年二月十二日 (Zoomで開催)
Early Medieval Monks and their Patrons: The Cases of Butsugon and Shinjaku-to

講師 Alessandro Poletto (日本學術振興會)

・ Kyoto Lectures 2021 on Zoom
二〇二一年三月八日 (Zoomで開催)

Tommy Atkins' in Japan: Examining the British Garrison of Yokohama (1864-1875) through First Person Accounts
講師 Thomas French (立命館大學)

・ 第16回 TOKYO 漢籍 SEMINAR 『金(女眞)と宋——十二世紀ユーラシア東方の民族・軍事・外交』
二〇二一年三月十五日

於 一橋大學一橋講堂中會議場
開會挨拶 稲葉 穰
『三朝北盟會編』を読む——亡國の史書 古松崇志

北宋最強軍團とその擔い手たち——澶淵の盟から靖康の變へ 伊藤一馬 (大阪大學大學院文學研究科招へい研究員)

「女眞」の形成——東北アジア諸集團の興亡 井黒 忍 (大谷大學文學部准教授)
司會 矢木 毅

・ 人文研アカデミーシンポジウム「狂い咲く、フーコー」
二〇二二年三月二十七日 (Zoomで開催)
コメンテーター 重田園江 (明治大學)、森元康介 (東京大學)

所員動靜

招へい研究員

。 FUESS, Harald ハイデルベルク大學教授
京都の「觀光公害」(文化連關研究客員部門)

期間 二〇二〇年八月十一日～二〇二〇年十一月十日
受入教員 藤原准教授

招へい外國人學者

。 秦 樺林 浙江大學中國古代史研究所講師

日藏古寫本、秦漢簡牘 受入教員 永田准教授
期間 二〇一九年五月六日～二〇二〇年五月五日

。 劉 雅君 上海大學社會科學學部副教授
東アジア史の視點からみた漢唐時代の皇太子制度 受入教員 宮宅教授

期間 二〇一九年七月三日～二〇二〇年七月三日
〇日

。 陳 瑤 厦門大學人文學院歷史系助理教授
中國近代長江中流域木造船船航運業の研究

期間 二〇一九年八月二日～二〇二〇年八月二日
一日
受入教員 村上准教授

。 方 艷 江蘇師範大學文學院教授
中日王權神話の比較研究 受入教員 岡村教授

期間 二〇一九年十月二日～二〇二〇年十月二日
〇日
。 張 葦航 上海中醫藥大學科技人文研究院副教授

- 日本古書研究 受入教員 平岡准教授
 期間 二〇一九年十一月二八日～二〇二〇年八月二四日
- 。馬 茜 寧夏行政學院政治學教研部副教授
 抗日戰爭時期の日本の「回教工作」に関する研究
 受入教員 中西准教授
 期間 二〇一九年十二月一日～二〇二〇年十一月三〇日
- 。李 磊 華東師範大學歴史學系副教授
 秦漢六朝時代の東アジアにおける政治構造と天下概念
 受入教員 宮宅教授
 期間 二〇一九年三月五日～二〇二〇年八月四日
- 外國人共同研究者
 。陳 鳴 華南農業大學人文與法學學院講師
 秦漢『盜律』・『賊律』の研究
 受入教員 宮宅教授
 期間 二〇一九年八月十九日～二〇二〇年八月十八日
- 。HAYASHI, John ハーバード大學 Ph.D. Candidate
 日本統治時代から戦後にかけての臺灣における治水事業や衛生事業 受入教員 藤原准教授
 期間 二〇一九年九月十五日～二〇二〇年四月二二日
- 。趙 椽錫 ハイデルベルク大學 Ph.D. Candidate
 東アジアにおける救荒作物に関する書籍の研究
 受入教員 藤原准教授
 期間 二〇一九年十月七日～二〇二〇年八月二〇日
- 日
 。PIITFIELD, Cryan Janek フランス國立極東學院 Research Assistant
 近代日本における水質汚染と環境紛争について
 受入教員 福家准教授
 期間 二〇二〇年一月九日～二〇二〇年八月三十一日
- 。SCHAEFER, Charlotte Johanna ハイデルベルク大學 Ph.D. Candidate
 日本における自閉症者を初めとする精神障害者の雇用
 受入教員 藤原准教授
 期間 二〇二〇年一月十四日～二〇二〇年六月三〇日
- 。RODRIGUES, Jamila Pacheco バージンガム大學 Visiting Lecturer
 Shamanism through the body: yuta's women's shamanic narratives on embodied pain, collective wellbeing and spirit communication
 受入教員 石井准教授
 期間 二〇二〇年三月八日～二〇二〇年五月八日
- 。餘 柯君 復旦大學博士後
 金剛智、善無畏梵漢對音譜と漢語中古音の研究
 受入教員 永田准教授
 期間 二〇二〇年十一月二四日～二〇二一年十一月三三日
- 。頼 霽澄 臺灣大學文學院中國文學系博士候選人
 晚明清初における僧詩選集の研究
 受入教員 永田准教授
- 期間 二〇二〇年十一月十六日～二〇二一年十一月十五日
 。MARCEAU, Lawrence Edward オークランド大學上級講師
 近世日本における『イソップ寓話集』の受容
 受入教員 稲葉教授
 期間 二〇二〇年十二月十八日～二〇二一年十二月十七日
- 研究生
 。石垣 章子
 漢譯佛典として位置付けられた疑偽經典の成立と思想の系譜
 受入教員 船山教授
 期間 二〇一八年四月一日～二〇二一年三月三十一日
- 外國人研究生
 。馬 延輝
 『儀禮』學研究
 受入教員 古勝准教授
 期間 二〇一九年四月一日～二〇二〇年六月三〇日
- 日
 。陳 瑞峰
 中國佛敎疑偽經敦煌寫本識語の研究
 受入教員 船山教授
 期間 二〇一九年五月一日～二〇二〇年七月三十一日
- 。趙 芙蝶
 人文科學とデジタル デジタル人文プロジェクト
 トユーター指向のデザイン
 受入教員 Witten 教授
 期間 二〇一九年十月一日～二〇二一年三月三十一日

日

。曹 天江

秦漢魏晉時代における「計校」事務の研究

受入教員 宮宅教授

期間 二〇一九年十月一日～二〇二〇年十二月二

日

。Qianqing Huang

一九二〇年代、三〇年代の日本における被差別

部落 受入教員 竹澤教授

期間 二〇一九年十月一日～二〇二二年四月三〇

日

。常 鉦熙

北宋時代における洛陽盆地の考古歴史學的研究

受入教員 岡村教授

期間 二〇一九年十月一日～二〇二〇年九月三〇

日

。朴 洙賞

高麗前期の王權 受入教員 矢木教授

期間 二〇二〇年四月一日～二〇二〇年八月三一

日

。高 楹楹

薩摩の海と徐海——16Cにおける硫黄島と浙江

間の硫黄貿易を中心に 受入教員 岩井教授

期間 二〇二〇年四月一日～二〇二二年三月三一

日

。陳 佩瑜

日本統治下の臺灣における「博物」の概念…科

學史上の臺灣自然文學と「博物誌」

受入教員 永田准教授

期間 二〇二〇年十月一日～二〇二二年一月三一

日

。胡 景南

陳致虛内丹思想の歴史源流についての研究

受入教員 古勝准教授

期間 二〇二〇年十月一日～二〇二二年九月三〇

日

。王 含元

中國北方青銅器文化の社會變動

受入教員 岡村教授

期間 二〇二〇年十二月一日～二〇二二年十一月

三〇日

。肖 文遠

日中比較の視點からみた曆書時間の近代化

受入教員 村上准教授

期間 二〇二二年一月一日～二〇二二年十二月三

一日

短期交流學生

。陳 佩瑜

日本東洋史學の文脈…ドイツ歴史學から日本東

洋學に至る歴史概念と「客觀性」の構築

受入教員 永田准教授

期間 二〇二〇年四月八日～二〇二〇年七月七日

出版物

紀要

・人文學報 第一一五號（紀要第一九〇冊）

二〇二〇年六月三〇日刊

・東方學報 第九五冊（紀要第一九一冊）

二〇二〇年十二月二五日刊

・人文學報 第一一六號（紀要第一九二冊）

二〇二一年三月三一日刊

・ZINBUN number 51

二〇二一年三月刊

研究報告その他

・東方學資料叢刊 第二八冊 矢木毅編

二〇二〇年六月三〇日刊

・轉換期中國における社會經濟制度 村上衛編

二〇二一年一月三〇日刊

・敦煌寫本研究年報 第一五號 高田時雄主編

岩尾一史、永田知之副編

二〇二一年三月三一日刊